

# 北本城々跡

飯田市座光寺地区児童館建設に先立つ  
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

# 北本城々跡

飯田市座光寺地区児童館建設に先立つ  
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

## 序

近年、飯田市街地では、店舗・事業所・住宅が過密化し、これに伴い、主要幹線を中心に市街地で交通渋滞が慢性化しています。その緩和を図るため、一般国道153号飯田バイパスをはじめとする幹線道路が整備されつつあります。これら道路整備の進行に伴い、公共事業を含めた諸開発が市街地周辺に広がり、且つ、急速に進行しつつあります。

市街地並びに周辺地域での諸開発の結果、文化財、特に埋蔵文化財をいかに保全するかが緊急の課題となっています。すでに知られているように、飯田市はその恵まれた環境と相まって、古来先人たちが各所で生活を営み、その痕跡を大地に留めています。これらは飯田・下伊那の歴史を明らかにする上で欠くべからざる財産であり、できるかぎり現在の姿で次代に伝えていくことが望ましいことですが、地域社会の発展、住民の福利厚生を考慮するとき、諸開発も無理からぬところとなります。

開発と保存、両者の実現は極めて困難な状況のなかで、座光寺小学校移転建設の際に一部調査された北本城々跡の隣地に、座光寺地区児童館が建設されることとなり、当教育委員会では、児童館建設地について、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることになりました。

今回発掘調査で、発見された内容は、城跡全体から見れば、極わずかな範囲にあたり、それだけで具体的な史実を明らかにするものではありませんが、城内における居住空間の位置付けがなされ、調査前の予想と反しないものであったといえます。

本調査結果は、本文中に記したとおりで、今後、本地区内において歴史資料の希薄な中世以降を中心とした研究に生かされることを希望しております。

最後になりましたが、本調査及び本書作成にあたり、深く理解とご協力をいただいた飯田福祉事務所、現地調査に従事された方々、並びに関係各位に衷心より感謝、お礼申し上げます。

平成4年3月

飯田市教育長

小林 恭之助

## 例　　言

1. 本書は、飯田市座光寺児童館の建設工事に先立ち実施した北本城々跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市教育委員会が直営事業として実施した。
3. 本書の発掘調査に関し、遺跡名を「北本城々跡」とし、略号にK H Jを用いた。本遺跡は座光寺小学校の移転新築に伴い昭和56年調査されており、このときの調査との混同をさけるため、実際の調査・整理に当たっては略号の後に本地の地番1726-1を付して行った。
4. 調査実施にあたり、調査対象部の南西用地境を基準とする2m四方の小区画を設定して作業を行なった。区画の名称は南隅を起点として、北西へA・B・C、北東へ1・2・3を付し、B 3・C 2などとなる。
5. 調査は、平成2年6月25日から重機による表土剥ぎを行い、27日からはこれと平行して、人力による調査を実施した。7月25日には測量作業現場での作業を終了し、続いて、報告書製作のため、整理作業を行なった。
6. 本報告書の記載は、溝址、溝状址を優先し、次にほかの遺構を掲載した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版ま本文末に一括した。
7. 本書は、小林正春・佐合英治が分担執筆した。なお、文書の一部について小林が加筆・訂正を行なった。
8. 本書に掲載された図面類の整理、遺物実測は佐合があたった。なお、同作業にあたり調査員及び整理作業員が補佐した。
9. 本書の編集は調査員全体で協議の上、佐合が行い、小林が総括した。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記載した数字は、検出面からそれぞれの深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に掲載した石器の表現として、使用痕及び擦痕は図内及び図外に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で示した。
12. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

## 本文目次

序	
例言	
目次	
I 経過	1
1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	2
II 遺跡の環境	3
1 自然環境	3
2 歴史環境	3
III 調査結果	8
1 遺構と遺物	8
1) 溝址	8
① 溝址 1	
2) 溝状址	8
① 溝状址 1   ② 溝状址 2   ③ 溝状址 3   ④ 溝状址 4   ⑤ 溝状址 5	
⑥ 溝状址 6   ⑦ 溝状址 7   ⑧ 溝状址 8   ⑨ 溝状址 9   ⑩ 溝状址 10	
⑪ 溝状址 11   ⑫ 溝状址 12   ⑬ 溝状址 13   ⑭ 溝状址 14	
3) 壕穴	17
① 壕穴 1   ② 壕穴 2	
4) 土坑	20
① 土坑 1   ② 土坑 2   ③ 土坑 3   ④ 土坑 4   ⑤ 土坑 5   ⑥ 土坑 6	
⑦ 土坑 7   ⑧ 土坑 8   ⑨ 土坑 9   ⑩ 土坑 10   ⑪ 土坑 11   ⑫ 土坑 12	
⑬ 土坑 13   ⑭ 土坑 14   ⑮ 土坑 15   ⑯ 土坑 16   ⑰ 土坑 17   ⑱ 土坑 18	
⑲ 土坑 19   ⑳ 土坑 20   ㉑ 土坑 21   ㉒ 土坑 22   ㉓ 土坑 23   ㉔ 土坑 24	
㉕ 土坑 25   ㉖ 土坑 26   ㉗ 土坑 27   ㉘ 土坑 28   ㉙ 土坑 29   ㉚ 土坑 30	
㉛ 土坑 31   ㉜ 土坑 32   ㉝ 土坑 33   ㉞ 土坑 34	
5) その他の遺構	32
① 穴址   ② N11・O11グリット焼土部   ③ 北部造成土部分	
6) 遺構外遺物	34
IVまとめ	41

## 挿図目次

挿図 1 北本城々跡及び周辺主要城跡・遺跡位置図	6
挿図 2 調査位置及び周辺図	7
挿図 3 溝状址 5	13
挿図 4 壁穴 1 石検出状態及び最終平面図	18
挿図 5 壁穴 2、土坑13石検出状態及び最終平面図	20
挿図 6 土坑 1・12・2～8、9・11	24
挿図 7 土坑 10・14～20、21・25、22	28
挿図 8 土坑 23・24、26～34	31
挿図 9 南部穴址	33
挿図 10 南東部穴址	34
挿図 11 東部穴址	35
挿図 12 西部穴址	36
挿図 13 北西部穴址、N11・O11グリット焼土部	37
挿図 14 北部穴址	38
挿図 15 北部造成土トレンチ調査部分穴址	39

## 付図目次

付図 1 北本城々跡遺構位置図
付図 2 溝址 1、溝状址 1・9、2～4・6～8・10～14

## 図版目次

第1図 溝状址 2・4・5出土土器、石器	44
第2図 溝状址 5・6・7・11出土羽口、石器、土器	45
第3図 壁穴 2、土坑 4・8・11出土土器、石臼、石器	46
第4図 穴址出土土器、石器	47

第5図	造構外出土石器、子持勾玉	48
第6図	造構外出土土器、石器	49
第7図	溝状址2・5・6・11、造構外出土鉄製品	50

## 写 真 図 版 目 次

図版1	調査地調査前（南から）、調査地全景（南東から）	52
図版2	調査地全景（南東から）、調査地全景（北西部）	53
図版3	溝状址1、溝状址2（西から）、溝状址2（東から）	54
図版4	溝状址3・7、溝状址4・7・（3）、溝状址5・6	55
図版5	溝状址8・10（右から）、溝状址9、溝状址11	56
図版6	堅穴1、堅穴1・溝状址3・4・7・11、土坑13・堅穴2	57
図版7	堅穴2・土坑13石検出状態、同上土層断面、堅穴2遺物出土状態	58
図版8	土坑3、土坑4、土坑6	59
図版9	土坑14、土坑24、土坑25	60
図版10	穴址掘り上げ状態、同上	61
図版11	造成土トレンチ調査部分、同上、子持勾玉出土状態	62
図版12	溝状址2出土仏器、同上（上面）、溝状址2出土黒色釉天目、同すり鉢、 同陶器・磁器、同砥石	63
図版13	溝状址5出土黒色釉天目、同すり鉢、溝状址5出土緑色釉天目、同上	64
図版14	溝状址5出土羽口、溝状址5出土鐵器・鉄滓、溝状址6出土鐵器、 溝状址7出土緑色釉天目・すり鉢	65
図版15	溝状址11出土緑色釉天目・陶器、同陶器、同上すり鉢・土器・磁器陶器、 堅穴2出土石臼	66
図版16	堅穴2出土天目・すり鉢、同上、土坑13出土天目、土坑14出土陶器・すり鉢	67
図版17	穴址出土天目・陶器・土器、同上、造構外出土黒曜石石鎚・剥片	68
図版18	造構外出土打製石斧、同横刃形石器・敲打器、同子持勾玉	69
図版19	造構外出土土器黒色釉天目、同緑色釉天目、同すり鉢	70
図版20	造構外出土磁器・陶器・土器、同上、造構外出土砥石、造構外出土鐵器・鉄滓	71
図版21	重機による表土剥ぎ作業、浮き土の排除作業、造構検出作業	72
図版22	造構掘り下げ作業、同上、造成部トレンチ調査	73
図版23	清掃作業、測量作業、ラジコンヘリコプターによる写真撮影作業	74

## I 経 過

### 1. 調査に至るまでの経過

飯田市における児童福祉行政の一端として、市内の小学校区単位を基準として、各地に児童センターの建設が年次的に進行している。

そうした中で、平成元年に市内の北端部にあたる座光寺地区の児童センター建設計画が具体的に示された。計画によると、その地点は、中世の山城「北本城々跡」の一画にあたり、埋蔵文化財の保護が必要な地であると判断された。

その計画に基づき、平成2年5月2日に、長野県教育委員会・飯田市教育委員会・飯田市福祉事務所それぞれの担当者により、現地においてその保護等についての協議を行った。

その結果、隣接地である座光寺小学校建設の際には、事前の発掘調査を実施した経過があり、その結果からみても、当該地も城跡の一部であり、重要な地点の一つと推測され、工事着手前に発掘調査を実施し、記録保存して後世に伝えることとなった。

### 2. 調査の経過

事前の協議を受け、記録保存の為の発掘調査に着手する運びとなつたが、現地は竹林のため、この竹伐採後、調査を実施した。

調査は、平成2年6月25日に重機による表土剥ぎ作業に入り、27日にはこれと平行して人力による作業に入った。土坑、穴などに繞き溝が多数検出され、29日からは造構の掘り下げ作業に入った。各造構の精査、掘り上げ後、隨時写真撮影、測量調査を繰り返し行い、7月25日には現地での作業はすべて終了した。

その後、平成4年度末まで飯田市考古資料館において、記録された図面・写真的整理、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、実測・写真撮影等を行い、報告書作成の作業にあたった。

### 3. 調査組織

#### (1) 調査団

調査担当者 小林 正春

調査員 佐々木嘉和・佐合 英治・吉川 豊・馬場 保之・渋谷恵美子

作業員 今村 春一・北村 重実・清水 三郎・豊橋 宇一・中平 隆雄  
福沢トシ子・藤本 幸吉・細田 七郎・正木実重子・松下 成司  
沢柳 敏介・吉川 正実

整理作業員 池田 幸子・伊原 恵子・大藏 祥子・金井 照子・金子 裕子  
唐沢古千代・唐沢さかえ・川上みはる・木下 早苗・木下 玲子  
柳原 勝子・小池千津子・小平不二子・小林 千枝・渋谷千恵子  
田中 恵子・筒井千恵子・藤本 宣子・丹羽 由美・萩原 弘枝  
原沢あゆみ・平栗 陽子・福沢 育子・福沢 幸子・牧内喜久子  
牧内とし子・牧内 八代・松本 恵子・三浦 厚子・南井 規子  
宮内真理子・森 信子・森藤美知子・吉川紀美子・吉川 悅子  
吉沢まつ美・若林志満子・斎藤 徳子

#### (2) 事務局

事務局 竹村 隆彦 (飯田市教育委員会社会教育課長) 平成2年度  
安野 節 (飯田市教育委員会社会教育課長) 平成3年度  
中井 洋一 (飯田市教育委員会社会教育課文化係長)  
小林 正春 ( " " 文化係)  
吉川 豊 ( " " 文化係)  
馬場 保之 ( " " 文化係)  
篠田 恵 ( " " 文化係)  
渋谷恵美子 ( " " 文化係) 平成3年度

## II 遺跡の環境

### 1. 自然環境

北本城々跡は飯田市座光寺万才・城地籍に所在する。

飯田市座光寺は、市街地の中心から約5km北方にあり、南を下伊那郡上郷町、北を同高森町に挟まれ行政上は飛び地となっている。座光寺地区は、東は天竜川・西は中央アルプス・南は土曾川・北は南大島川により区切られた、南北約2km、東西約7.5kmの旧座光寺村である。

当座光寺地区内は南北方向に走る断層崖により段丘が形成され、天竜川右岸では比較的良好に段丘地形が捉えられる。地区のほぼ中央を横断する比高差約100mの段丘崖で、大きさは俗にいう上段、下段に別れている。山麓から発達した扇状地が段丘面をおおった上段と、崖下に湧水地を控えた下段それぞれに、小段丘と扇状地が複雑に連続、形成されている。さらに、これを小河川が浸食して小さな谷間を作り、各所で微地形の変化が認められる。

本遺跡は、旧座光寺村東部にあり、先述した俗にいう段丘崖上段が、南大島川によって大きく浸食されてできた南側の万才台地の段丘端に位置している。段丘先端からは、いわゆる下段の南東に広がる恒川遺跡群をはじめ、各古墳群が見渡せる。本調査地点の標高は550mで、南東に2.3kmの距離にある天竜川との比高差は、145mである。

### 2. 歴史環境

座光寺地区における発掘調査の最初は、大正11年11月に現在の東日本鉄道飯田線にかかるて調査された大塚（新井原12号古墳）で、この頃鳥居龍藏氏の遺物調査も行なわれている。

大正12年には、本遺跡の南西小段丘下にある畦地1号古墳石室が、座光寺小学校職員と高等科生徒によって、清掃調査され、銀製の「垂飾付長鎖式耳飾り」のほか、玉類、馬具などが発見されている。その後昭和30年代まで記録は無く、破壊のみが進んでいたと思われる。

昭和37（1962）年には、前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の災害復旧工事用採土に先立ち、下伊那教育会歴史調査部によって上段の一部座光寺原遺跡が調査され、弥生時代後期後半の標識「座光寺原式」が設定されている。

その後いくつかの発掘調査が行なわれ、昭和45年には中央自動車道建設に伴う発掘調査で、座光寺地区では宮崎、大門原など5遺跡が調査された。

昭和50（1975）年には、農業構造改善事業に伴う道路部分の調査で、中島遺跡が座光寺考古学

研究会・下伊那教育会考古学委員会によって調査され、弥生時代終末期標識「中島式」の設定の元となった。

昭和51（1976）年度から一般国道153号座光寺バイパス建設に伴う発掘調査が、当駅市教育委員会によって行なわれた。その結果、恒川遺跡群は多期にわたる遺跡の密集地であり、且つ、重要遺構・遺物の出土があり、古代伊那郡の推定「郡衙」の一画として注目された。

その後、一般国道153号座光寺バイパス全通直後から、道路添いに店舗等民間の開発が増加し、それに伴う緊急発掘調査が行なわれた。

昭和61年～平成3年（1986～1991）までに、田中・倉垣外地籍、恒川B地籍、阿弥陀垣外地籍、新屋敷地籍で、大小10ヶ所の調査が行なわれた。

上記の通り、この地域の道路添いの開発は著しく、遺跡群の保護は極めて困難な状況にあるが、恒川遺跡群内に「郡衙」の確認を求めて、昭和57年度から文化庁の補助を受けた恒川遺跡群確認調査が始まり、平成2年度で10年を経過した。調査地点の制約等から、まだ確証には至っていないが、遺構・遺物共に傑出したものもあり、更に重要性は増している。

以上、地区内における、埋蔵文化財の調査結果のいくつかをふまえ、地区内の歴史上の変遷を既述すると次のようである。

座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地は20余りを数え、縄文時代から近世に至るまで切れ間なく存在している。遺跡の時期的分布は、上段地帯に縄文・弥生時代の遺跡があり、山寄りほど縄文時代の遺跡濃度が増している。中央の段丘崖に古墳、中世山城が位置し、下段には縄文時代から近世の遺跡が複合して分布している。

当地区内での各時代の具体的な内容を見ると、縄文時代においては、その早期から晩期まで途切れることなく、各時代の遺物が、上段・下段のほぼ全域から発見されている。この中で、最初の人々の痕跡として、縄文時代早割期の有舌尖頭器の出土例があり、これより前、旧石器時代から人の住んだ可能性が強い。地区内の出土遺物及び、伊那谷における座光寺の位置等から見て、この時代から、この地区が中心的な役割をはたしていたと判断される。

続く、弥生時代においては、地区内において中心的な地であった姿がより明確に捉えられる。それは、弥生時代中期から後期にかけて、恒川式、座光寺原式、中島式と三つの標識遺跡が存在し、各期の大集落が展開したことで知られる。

古墳時代を代表する古墳が当地において多いことは、古くから知られており、家宝として玉などを所蔵している人たちも多い。現存する古墳は10余りであるが、下伊那史には古墳総数66基の記録がある。その後、石行遺跡、高岡遺跡の調査等で、新たに11基の古墳が確認されている。

本時代も含め、各時代の遺跡の開墾、盗掘による破壊は地区内全域におよび、盗掘にあっていない古墳は皆無といって良いだろうが、現在確認されただけで78基の古墳が構築された事実や、その副葬品をはじめとする内容にも傑出したものが多いことから、伊那谷の該期を代表する地区の一つとなっている。

統く、奈良、平安時代については、当地区が、歴史上最も重視されるべき時代といえる。それは、先述した恒川遺跡群における、古代伊那郡衙址の存在であり、定額寺院の寂光寺の存在である。この時代、伊那谷の政経の中心であったことは、いうまでもなく、さらに、大和朝廷による国政遂行上でも、欠くことのできない地であったといえる。

次時代の中世以降は、当地区において、歴史資料の希薄な時代である。

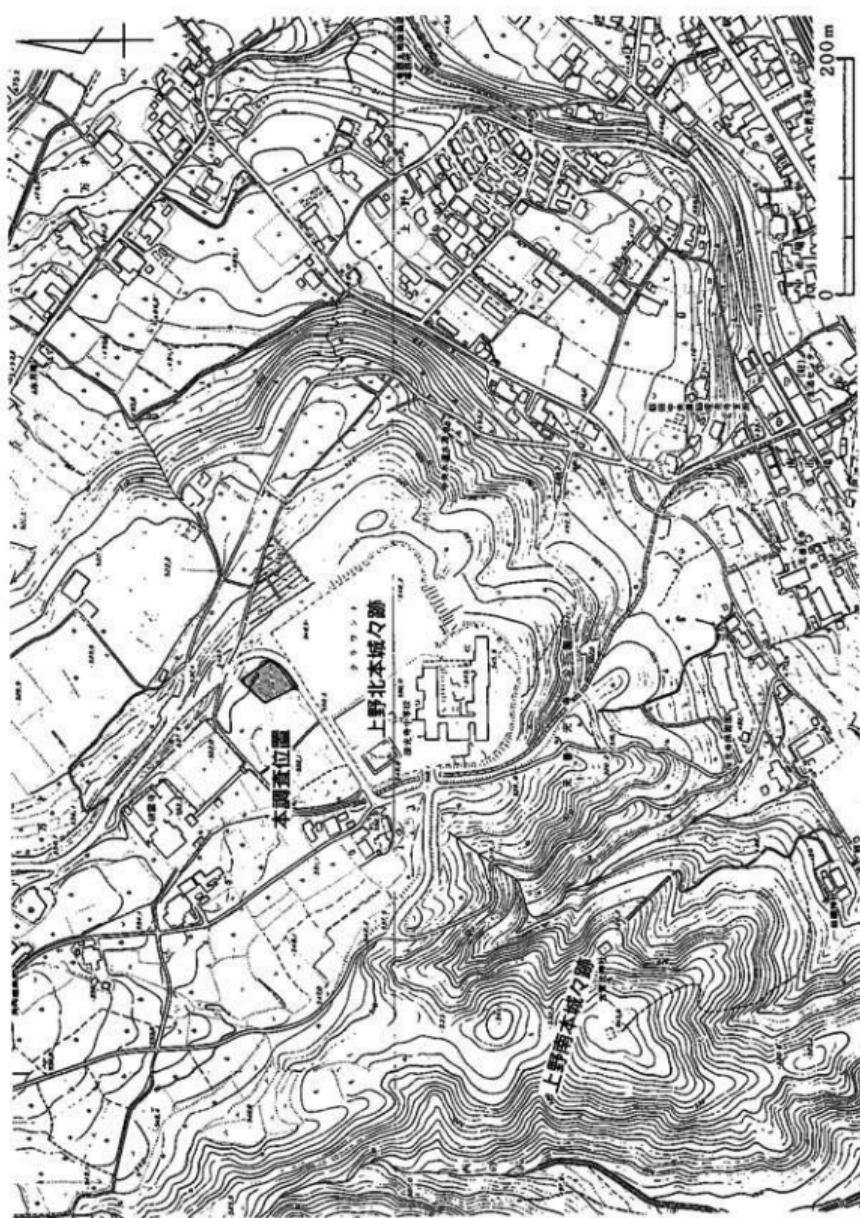
昭和56年に座光寺小学校の移転新築に伴い調査され、さらに今回、学校の敷地となった一帯の北西に隣接する地を、調査する事になった北本城跡、本沢川、相沢川によって作られた二本の谷を挟んで、南西に350mを測る尾根上にある、南本城跡の二城があるにもかかわらず、具体的な歴史事実は未解明な状況である。しかし、各所で行なわれている埋蔵文化財の発掘調査において、輸入磁器を含む、ほかに例のないような優品を出土することも多い。史実には登場しないが、本時代に於いても、当地域は重要な役割をはたしていた事が推測される。



1. 上野北本城々跡(調査地) 2. 上野南木城々跡 3. 飯田城々跡  
 4. 愛宕城々跡 5. 今宮城々跡 6. 松尾城々跡 7. 鈴岡城々跡  
 8. 神之峯城々跡 9. 恒川遺跡群 10. 中島道路 11. 座光寺原遺跡  
 A. 高岡1号古墳 B. 新井原12号古墳 C. 哉地1号古墳 D. 北本城古墳

插図1 北本城々跡及び周辺主要城跡・遺跡位置図

挿図2 調査位置及び周辺図



### III 調査結果

#### 1. 造構と遺物

##### 1) 溝 址

###### ① 溝址1 (付図2)

調査範囲の南東側に検出した。北東側は未調査部分に、南西端は、用地外にそれぞれ延びている。溝状址9を切り、土坑7・8と重複する南西側でやや方向を変えるが、軸方向は、おおむね N47°Wを示す。確認した長さは30.5mを測る。深さは検出面から5~14cmであるが、底部には凹凸が有り、土坑状に24cm凹む部分もある。比高差で見ると、調査地全体が南西から北東へ傾斜していることもあり、底部は北東側へ97cm低くなっている。壁面がきわめてゆるく傾斜しているため、底部中央の深い部分のみが把握できるだけの所もあり、幅は50cm~2mと場所により異なる。また、検出した肩部も明瞭でなく2m以上に広がる可能性が高い。覆土のほとんどは灰黒色土で、底部に近い所では部分的に泥の堆積も見られる。遺構の検出状態、覆土から南西から北東に流れていた自然の流路と把握されるが、常に水が流れていた溝では無いと考えられる。

本址に直接伴う遺物の出土は無く、時期は不明である。しかし、地形及びほかの造構の検出状況から、本調査で確認した造構の中では新しい時期のものといえる。

##### 2) 溝状址

###### ① 溝状址1 (付図2)

調査範囲の南西隅に検出した。北西側は用地外に延び、南東側は排水の為に掘った溝で壊してしまい、この溝を越えての検出できなかった。確認できた長さは3.5mで、軸方向はN38°Wを示す。幅は55cm前後、深さは検出面から4~11cmを測る。壁面は角度をもって立ち上がっている。底部は平坦で、比高差もほとんど無い。覆土は黒色土の一層で、水が流れていた痕跡は認められない。調査できた部分も少なく性格は判断できない。

遺物には、天目茶碗の細片が一点あるのみで、時期判断できるものではない。

###### ② 溝状址2 (挿図2 第1・7図)

調査範囲の北西側に検出された。溝状址5・8・10を切り、溝状址4・7と重複、溝状址3と

切り合い、溝状址 6 に切られている。北東側は未調査部分に延びており、調査できた長さは 22.5 m を測る。軸方向は N51° W を示す。幅は南西端 2.2m、北東部で 4 m にいたん広がり、未調査部分にかかる北東端では 3.1 m にとまた狭くなる。検出面からの深さは南西側 31 cm、北東側 57 cm で、比高差で見ると 71 cm 北東部が低くなる。壁面は余り角度を持ったものでは無いが、凹凸がほとんど無いもので、切り取ったようになっている。東側の底部には平坦部が認められ、断面形が逆台形となっているが、西側は「V」字状に近いものである。底部、壁面の状態から本址は人為的に掘り回められた溝状址である。覆土は黒色土と暗褐色土の上下二層を把握した。南西側は黒色土が厚く、暗褐色土は底部近くに堆積しているのに対し、北東側ではほとんど暗褐色土となり、黒色土は上部にわずか認められるだけで、泥質になっている。

本址と同時存在もしくは関連施設となる可能性のある遺構として、溝状址 3・4・7 がある。前二者はそれぞれ本址の南西部北東壁と、南端南東壁に直角に検出され、本溝状址を越えて確認できない事から、本址に関連した遺構の可能性がある。西隅を切り込む溝状址 7 は本址に対し直角でも無く、同方向でもないが、一時的に底部に水が流れた痕跡が認められ、これが、本址底部にも連続している。この事から同時に存在していたものと判断できる。

本址は、底部の状況や形態、周囲の遺構との関連から、水利の為の溝では無く、城跡に関連した区画、または堀などの施設と考えられる

遺物は、本調査地の中の遺構としては比較的多いほうである。緑色の釉薬の天目や土なべ、磁器などもあるが、土器類として図化等できたものに、黒色天目の底部片と仏具、すり鉢、須恵質の茶碗がある。

第 1 図 1 の底部には天目釉は認められないが、胎土は天目茶碗のそれで、皿などの破片であろう。焼成は良好、色調は茶白である。2 の仏具は灯明で、体部が少しお欠損する。底部のほぼ中央に、貫通しない穴が開けられている。地の色調は白色で、縁がかった濃い茶色の天目釉が付されている。焼成は良好である。3・4 のすり鉢には光沢の無い茶色の釉薬が、内外面共に付されている。3 の底部には糸切り痕が見られるが、調整で消されている。5 は焼成良好の須恵質の茶碗で断面の色調はうすい灰色である。内外面とも茶色の釉薬が付されるが、天目釉とは異なり光沢の無いものである。図化部 1/6 残存である。

石器として、砥石 6・7・8 の三点がある。二面もしくは三面が使われており、6・7 はもとの形を止めていない。

ほかに、鉄製品と鐵鎌がある。鉄器は保存状態も悪く器種を明確に断定できない。第 7 図 1・2 は刀子状のものであるが、刃部が認められなかった。4 は釘とも思われるが、端部は切られているようである。鐵鎌には親指大で重いものと、小指の頭程のものが数個ある。

本溝状址の時期は、これら遺物から中世、16 世紀代と考えられる。

### ③ 溝状址3（付図2）

西端に「L」字状に検出した部分を溝状址3としたが、西隅の溝状址7も本遺構の一部の可能性がある。北東南西方向溝は用地外に延び、北西南東方向溝が溝状址11を切り、溝状址2・12と切り合う。それぞれの軸方向はN51°EとN37°Wを示し、やや鈍角に広がったものとなっている。調査できた長さはどちらの方向も8mである。幅は場所により異なり、北西南東方向部が1.4m程、曲部及び、北東南西方向4mが1m前後を測り、南西端の部分では70cm程である。壁面は凹凸無く、角度を持って立ち上がっている。断面形は、ほとんどの部分が「V」字状に近いものとなっているが、溝状址11と切り合っている幅の広い部分は底部に平端部があり、逆台形の断面形となっている。また、北東南西方向溝で、幅が変化する部分の底部には11cmの段差が認められる。検出面からの深さは16~23cmを測るが、比高差で見ると、南端より北端が21cm低い。覆土は黒色土の一層である。

本址は、場所により幅などが変化している。全体の形態から見ても、なんらかの意図を持って人為的に掘られたものであるが、壁面、底部の状態から水利の為とは考えにくい。北西南東方向の溝とは直角にならない為、別遺構と判断したが、両者を完掘すると、北東南西方向の溝もやや鈍角に広がったものであった。この事から同形態の掘り方の溝状址7が、本址に連続する遺構となる可能性は高い。西側は用地外となり未調査であるが、「コ」の字形、もしくは方形に掘られた区画の為の施設が考えられる。

出土遺物には、土なべと思われる細片が一点有るのみである。遺物から時期の把握はできないが、周辺の遺構などの状態から、城跡に関連した施設と判断した。

### ④ 溝状址4（付図2 第1図）

調査範囲の西端に検出した。溝状址2・7・11・土坑19などと切り合い、重複する部分もあるが新旧関係は不明である。「J」の字状に把握したが、西隅部分の途切れるようにきわめて浅い部分があり、この部分から北西南東方向の西側ものと、北東南西方向のものとでは、掘り方の状態が異なる。また、部分的にではあるが、覆土に違いも見られることから別遺構の可能性がある。確認した長さ及び軸方向はそれぞれ、北西南東方向の西側溝9.7m・N28°W、北西南東方向の東側2.7m・N44°W、北東南西の溝7.8m N57°Eである。幅は北側となる二辺が1.4~0.5m、北西南東方向の西側の溝が1.1~0.35mを測る。深さは検出面から3~28cmである。南端と西隅の比高差は13cm、西隅と北側の最深部とは23cmの差があり、全体としては南から北へ36cm低くなっている。北側部分の壁面は凹凸が無く、切り取ったように掘られており、断面形も「V」字状に近い。これに対し、北西南東方向の西側の溝は浅いこと、穴などと切り合うため、壁、底部とも凹凸の激しいものである。また、この部分の覆土には、灰黑色土が認められたが、溝状址2・7を越えた北側では黒色土の一層であった。

出土遺物には、天目釉の碗・皿、常滑、すり鉢、青磁などがあるが、出土量も少なく、みな破片である。図化した第1図9は指り鉢の底部で、光沢の無い茶色の釉薬が見られる。

ほかに、径4cm程の鐵鏃がある。大きさのわりに軽く、粘土塊状である。

遺物、周辺の遺構から、中世の城跡に関連した区画等の施設と考えられる。

##### ⑤ 溝状址5（付図3 第1・2・7図）

調査範囲の北部に検出した。溝状址2・6・10・11・14、土坑14・28に切られている。北西南東方向に幅広く確認され、北西側は用地外に延びている。軸方向はN41°Wを示す。調査できた長さは17.2mである。幅は6.6～5.1mを測り、南東側が狭くなる。深さは検出面に差があるため9～34cmと場所により異なる。比高差で見ると、中央部よりやや南東に最深部がある。これよりさらに南東側は徐々に浅くなり、溝は途切れている。また、北西部では17cm高くなる。壁面は絶じて緩やかな立ち上がりで、特に溝状址2の北側北東壁と南東部先端はスロープ状になっている。底部は壁との境が明瞭に把握できず、全体が緩やかな傾斜面となっている。覆土は炭混じりの黒色土で、人為的に埋められている。

出土遺物は、本調査で把握した遺構の中では多いほうである。みな破片で、図化できるもの余り無い。土なべ、天目茶碗・鉢・皿・陶器、すり鉢、羽口などがあり、天目には黒色、茶色、緑色の釉薬のものがある。

第1図10は土なべで図化部1/10の破片である。胎土中には小石粒、雲母が見られ、焼成は普通である。二次焼成を受け、表面には全体にすすぐれ厚く付着している。11は茶色の釉薬の天目茶碗で、焼成は良好である。陶器の皿12は底部にも淡い緑色の釉薬が付されたもので、内面中央部に、刺突により絵が描かれている。13・14・15のすり鉢には、どれも内外面とも茶色の釉薬が付されるが14は紫味が強い。焼成はどれも良好、13の胎土中には黒粒が見られる。羽口第2図1の孔は直径23mmで、濃い紫色に発色したガラス質の部分が見られる。

石器には、砥石、海浜石、敲打器が有り、第2図2の砥石は四方の小口までをも使用している。また、敲打器については、直接ともなうものは不明であるが、溝状址などと同時期と把握される穴から、数本の敲打器が出土したものがあるため、本遺構の遺物として扱った。

ほかに、鐵器二点と鐵滓、錢がある。第7図5は刀子などの破片とも思えるが、刃部は認められない。6は釘であろう。鐵滓は、本調査で確認した遺構の内では一番多い。子供の拳ほどの碗形滓一個のほか、径2～3cmのものが数個ある。錢の保存状態はきわめて悪く、縁の部分のみが残存しており、取り上げ時に破損し、錢名等は不明である。

本址は、出土遺物、遺構の形態、周辺の遺構の状況から、16世紀・中世の城跡に関連した掘やなんらかの区画施設と考えられるが、切り合い状態から、本調査で確認した遺構の中では古い時期のものである。

#### ⑥ 溝状址6（付図2 第2・7図）

調査範囲の北部に検出した。溝状址2・5を切るが、溝状址14、土坑14との新旧関係は不明である。溝状址5の南壁に近い部分と重複してほぼ「L」字状に確認したが、土坑14を越えた所で方向をさらに変えている。北西は用地外に、東は未調査部分に延びている。調査できた長さは北西南東方向10.5m、北東南西方向5mである。前者の軸方向はN44°Wを示すが、後者の部分は方向が定まらず、おおむねN61°Eである。幅は70~100cmを測る。溝状址5との新旧関係が、上部では把握できなかったため、最終的な検出面からの深さは9~15cmであるが、本来は25~41cm以上あったものと考えられる。比高差は北西から南東に向かって、29cm低くなっている。壁面はゆるく立ち上がり、底部の幅も狭いため、断面形は開いた「V」字状となる。覆土は黒色土で、5~20cmの石が混入し、北西部程多くなる。

出土遺物には、土器、天目片、石器、鉄器がある。出土量はきわめて少なく、土器類に図化できるものは無い。

第2図の1・2は敲打器で、直接本址に付属するかは不明である。鉄器の第7図7は小刀と思われるが、保存状態はやや悪い。8は釘で、頭部の形状から見ると、後出的なものかもしれない。また、本址に共うものでは無いが、南角の上部から、子持勾玉が出土している。

出土遺物から、確実な時期判断はできないが、周囲に確認した、同様の溝状址等の状況から、中世の城跡に関連した、区画等の施設と考えられる。

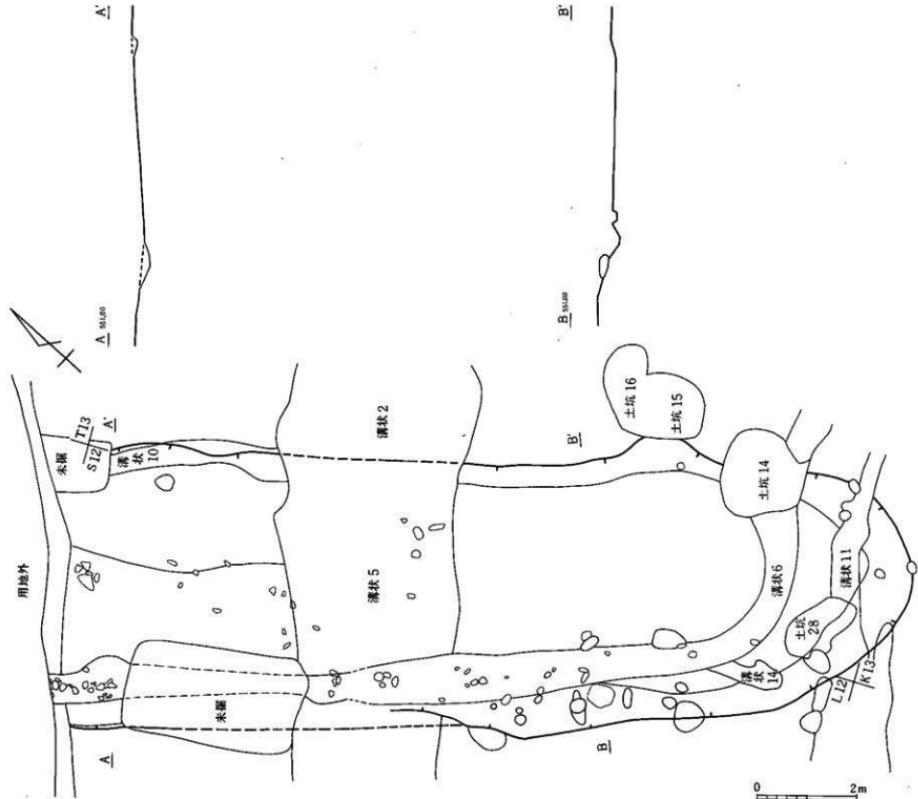
#### ⑦ 溝状址7（付図2 第2図）

調査範囲の西隅に検出した。溝状址2・4と切り合うが、覆土から新旧関係は把握できなかった。西側は用地外に延び、溝状址2の底部には、本址底部から連続する凹が検出された。これは覆土の状態から、意図的に掘り凹められたものでは無く、水の浸食によってできたと考えられ、本址は溝状址2と一緒に存在していたものと把握した。調査した長さは6mで、軸方向はN72°Eを示す。幅は1m前後を測る。深さは21~28cmで、比高差は西から東へ10cm低くなる。壁面はゆるく立ちあがるが凹凸の無いものである。断面形は開いた「V」字状となる。覆土は黒色土である。

出土遺物には、緑色の天目釉の皿とすり鉢が、数点あるのみである。

図化できるものは、第2図8のすり鉢のみである。内外面に灰黒色の釉薬が付されており、底部には糸切り痕を残している。焼成は良好である。

遺物のみから、時期判断はできないが、周囲の溝状址などの状況、特に溝状址3は本址に連続した一つの造構の可能性がある。この事から、なんらかの区画や堀など城跡に関連した施設と考えられ、中世・16世紀に位置付けられる。



博图 3 溝状址 5



### ⑤ 溝状址8（付図2）

北端に土坑18と切り合って検出されたが、新旧関係は不明である。北西は用地外に延びている。南東側は溝状址2に切られており、これを越えては確認できなかった。調査できた長さは5.6mである。軸方向はN40°Wを示し、幅は50~80cmを測る。検出面からの深さは10~20cmであるが、比高差で見ると底部は南東側へ36cm低くなっている。壁面は比較的角度を持って立ち上がるものである。底部には平坦部は無く、断面形は船底状となる。覆土は灰色土である。

遺物の出土は無く、時期は不明であるが、地形に反した方向に検出されており、周囲の造構の状態から、城跡に関連した区画等の溝である可能性がある。

### ⑥ 溝状址9（付図2）

南端に溝1に切られて検出された。南西側は排水のために掘った溝で壊してしまい、これを越えての把握はできなかった。溝1に切られた北東部では、ほぼ直角に曲がっている。曲がった先は土坑7と切り合うが、新旧関係は不明である。調査できた長さは、北東南西方向2.9m、北西南東方向50cmである。前者の部分の軸方向はN49°Eを示す。幅は20~30cm、検出面からの深さは12~19cmを測る。比高差で見ると中央部が高く、西側へ4cm、東側へ10cm低くなっている。底部は平坦で、壁面は角度を持ったものであるが、確認できた部分は、浅いため本来の形態を見い出せるものではない。

遺物は、何も出土せず、時期、性格は不明である。

### ⑦ 溝状址10（付図2）

調査範囲の北部に、溝状址8と共に検出した。溝状址5の北東壁と重複し、これを切っている。北西側は未調査部分を経て用地外に延びているものと思われる。南東側は溝状址2に切られ、これを越えて本址は確認できなかった。調査できた長さは3.4m、幅40~70cmを測る。少し蛇行しているが、おおむねの軸方向はN40°Wを示す。検出面からの深さは、7~15cmを測るが、比高差で見ると、南東側が23cm低い。底部は船底状になる部分と、平坦になる部分とがあるが、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。東側2.5mにある溝状址8とほぼ同方向で、覆土も同じ灰黒色土であることから、両者にはなんらかの関連性があるものと考えられる。

遺物は、何も出土せず、遺物から時期判断はできないが、周囲の造構の状態から、城跡に関連した造構の可能性が強い。

#### ⑪ 溝状址11（付図2 第2・7図）

調査範囲のほぼ中央を、北東南西方向に横断する形で検出された。竪穴2、溝状址3、土坑13に切られ、溝状址5を切る。また、新旧関係不明であるが溝状址4、土坑21・25・28と切り合う。南西側は用地外に、北東側は未調査部分にそれぞれ延びている。調査できた長さは25.5mで、軸方向はN62° Eを示す。幅は30~140cmを測る。深さは検出面から4~17cmであるが、斜面に検出されているため、比高差は北東端で、80cm低くなる。壁面底部とも凹凸があり、場所により形態が異なっている。特に、土坑21と切り合った東側は、最終的に幅30cm程の溝が3本並んだ状態となり、南に40cmの所にも同様の溝が確認された。この溝は竪穴2の部分から始まり、北東端で合流する形となっている。竪穴2を越え西側にはこれに連続する溝の把握はできず、本址と一緒にものものと考えられる。覆土は炭混りの黒色土で、底部には部分的に砂利が認められた。常に水が流れていたものでは無いが、形態から排水等の水利を目的にした施設として掘られたものと思われる。また、覆土の状態から、人為的に一気に埋められているものと考えられる。

出土遺物は少なく、みな破片である。土師器、天目茶碗、摺り鉢、磁器、鉄器などがあり、天目茶碗には、黒色と緑色の釉薬のものがある。

図化した第2図9は碗または小鉢で1/4残存する。うすい緑色の釉薬が厚くかけられており、磁器と考えられるが、胎土は須恵器に近い。焼成は良好である。すり鉢10・11の釉薬は暗い茶色を呈し、地色は茶白である。

鉄製品として第7図9・10・11がある。破片で形態を確実に把握できないが、10・11は釘と考えられる。

ほかに、径2~3cmの鉄滓数個と、銭がある。銭は破片で全体が綠青化しており、保存状態はきわめて悪い。

詳細時期は不明であるが、出土遺物から中世の城跡に関連した遺構と考えられる。

#### ⑫ 溝状址12（付図2）

調査範囲の西部に検出した。南東端は溝状址3と切り合い、これを越えて本址は検出できず、北東部は穴と重複し、この部分で止まっている。溝状址3、穴のどちらも新旧関係は把握できなかった。調査できた長さは1.8m、幅は60~70cmを測る。軸方向はN45° Eを示す。深さは検出面から15cm程を測り、底部の比高差は無い。壁面は比較的角度を持って立ち上がっている。底部との境があまり明瞭でなく、断面形は「U」字状に近い。覆土は黒色土である。

遺物は、何も出土せず、時期、性格は不明である。

### ⑬ 溝状址13 (付図2)

調査範囲の東部、溝状址5の南壁上に検出した。北西端、南東端は、それぞれ溝状址5と穴に接して、その部分で止まっている。調査できた長さは80cm、幅は12cmを測り、軸方向はN31°Wを示す。検出面からの深さは4cmと浅く、比高差も認められない。壁面は残存部が少ないため、ゆるく立ち上がっており、底部には凹凸がある。覆土は黒色土の一層である。

出土遺物は、何も無い。時期、性格は不明である。

### ⑭ 溝状址14 (付図2)

調査範囲の東部、溝状址5の南壁に確認した溝状址である。北西端は溝状址6と切り合い、これを越えて本址は把握できず、南東部は止まっている。溝状址5の南壁精査中に確認されたため、溝状址6との新旧関係も把握できなかった。調査できた長さは1.4m、幅は30~50cmを測る。軸方向は概ねN24°Wを示す。検出面からの深さは5cm前後で、北西側へ3cm傾斜している。壁面、底部共に、小さな穴状の凹みが多数認められ、凹凸の激しいものとなっている。

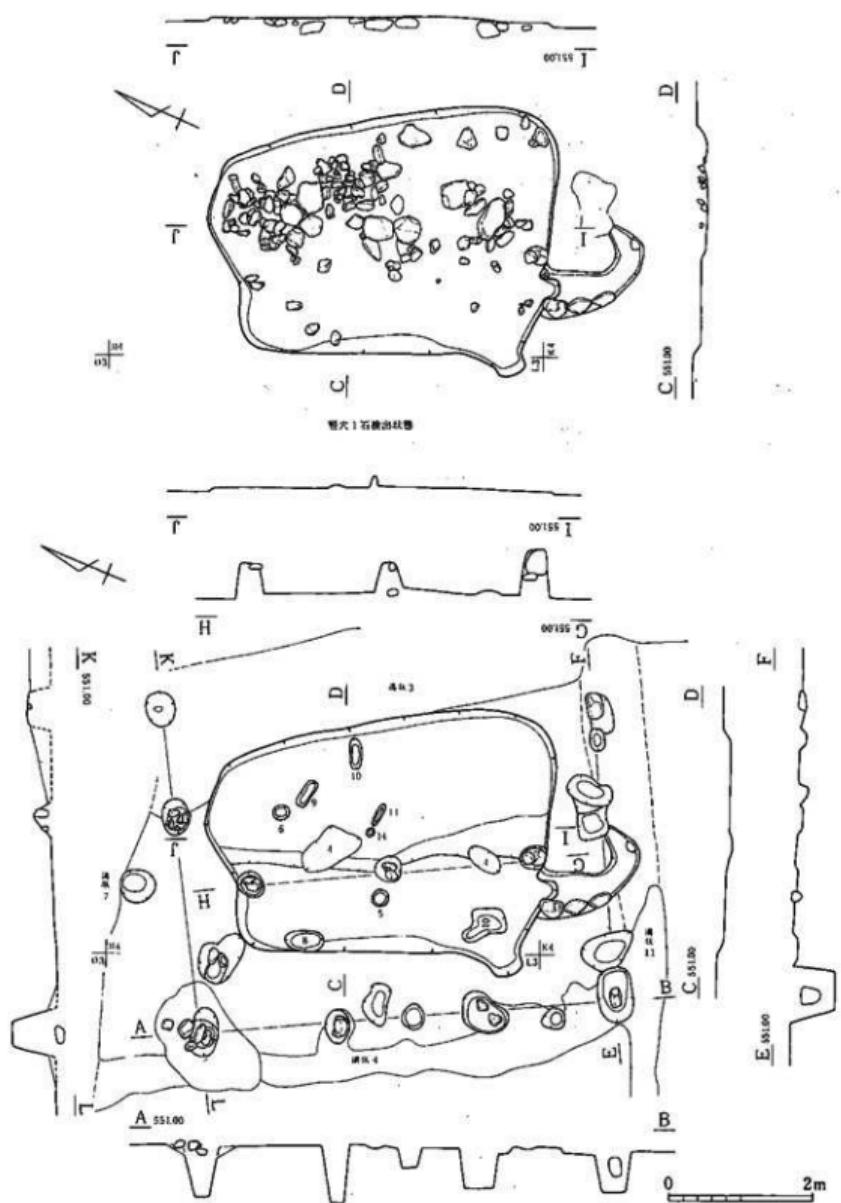
遺物は、何も出土せず、時期、性格は不明である。

## 3) 穴

### ① 穴1 (挿図4)

調査範囲の西部に検出した。北東壁が溝状址3と接し、これを切っている。歪んだ長方形で最大部での規模は、5.6×3.4mを測る。これに対する西側の二辺は短いものとなり、南西壁3.9m、北西壁2.7mである。長軸の方向軸はN26°Wを示す。深さは検出面から9~15cmを測る。北東側には径10~60cm程の石が検出された。北隅部分に特に多いが、規格性を持って並べたり、積み上げたりした痕跡は認められなかった。壁面はゆるく立ち上がっており、底部との境は余り明瞭でない。底部は石の検出された北東側が南西側より10cm程低く、ほぼ中央部にゆるい段差が認められる。北東側、南西側とも浅く細かな凹凸はあるものの、総じて平坦なものである。覆土は黒色土の一層である。

本址に伴なう可能性の高い施設として、中央部の段差の肩部に検出された穴3本と南東壁から張り出す溝状部、さらに、本址を囲むように検出された穴がある。溝状部底部は本址底部より2cm程高く、平坦なものである。西壁には40cm程の石が3個並べられ、本址内部に検出された多量の石との関連が考えられる。穴については竪穴内部の穴と外側に確認された穴とが、直行する部分には穴は検出できないが、西側の列とは平行で、この列の軸方向はN29°Wを示す。検出面からの深さは竪穴内部のものが43~63cm、西側の列が58~81cm、北と南のものが15~31cmを測る。



挿図4 窒穴1、石棟出状態及び最終平面図

平面形には円形のものと、方形のものとがあるが、ほとんどの穴には石が混入している。底部に密着した石はもともと敷かれていたものと考えられるが、上部にあるものは、柱抜き取り後入れられたものであろう。この状態は竪穴内部の穴、周囲の穴共に見られ、このことからも関連性を指摘できる。北と南側列に直行し対応する穴が検出されておらず、北東側が溝状址3と重複し、把握できないため確実なものでは無いが、中央部に石敷等の施設を持った一辺6mの建物址等の施設が想定できる。建物址とすれば、溝状址4と把握したが、ほかの部分とは形態の異なる南西部、浅く検出作業により把握できなくなった溝状址11の西部は、本址の雨落ち等の施設である可能性がある。

出土遺物には、土なべ、須恵質の壺があるが、出土量もきわめて少なく、破片で図化できるものでは無い。壺には、うすい釉薬が内外面とも付されており、波状文下に五条の沈線が見られるが浅いもので、釉薬により器面は平坦となっている。

時期は、出土遺物から中世に位置づけられる。また、周囲の造構の状態等から、城跡に関連した造構と考えられる。

## ② 竪穴2（拵図5 第3図）

調査範囲の中央部に検出した。溝状址11を切り、土坑13と接しているが、新旧関係は不明である。平面形は方形で、長軸方向はN64°Eを示し、規模は3.2×2.3mを測る。検出面からの深さは中央の最深部で28cmを測る。南東部を除き大小の石が多量に混入している。中央部に35cm程の石が、北西壁ぎわには5～10cm程の石が集中しており、なんらかの意図を感じさせるが、並べたものでは無く、投げ入れられた状態である。また、北に接する土坑13にも本址の石と連続して大きな石が検出されており、同一造構もしくは同目的の為に搬られた造構の可能性が高い。南西壁は比較的角度を持って立ち上がるが、ほかの壁面はゆるく立ち上がっている。底部には凹凸があり、東側がやや深い。また、北隅と西隅に近い所には、壁面を切るように、幅15cm程の溝が中央に向かって検出された。深さは底部から4～10cmを測る。覆土は黒色土で、石と共に一気に埋められている。

出土遺物は少なく、みな破片で図化できるものもあり無い。天目には壺・茶碗・皿があり、灰釉陶器、すり鉢のほか小石程の粘土塊がある。天目釉のものにはうすい緑色のものも一点含まれている。

第3図1・2は1/7と図化部残存の天目茶碗、3は1/6残存の天目の皿で、2・3には底部外面にも釉薬が付されている。焼成はみな良好である。4のすり鉢は焼成良好で、釉薬は灰色がかかった茶色を呈している。

石器として5の石臼と6の砥石がある。石臼は1/6残存し、すり合わせの部分が剥落するが茶臼であろう。砥石は自然石のまま使用していたものが、破損したものと考えられる。

ほかに、小石大の粘土塊と鉄滓が数個ずつ、錢がある。錢の保存状態はきわめて悪く、取り上げ時に破片となつたが、元武通寶である。

時期は、出土遺物から中世、16世紀に位置づけられ、城跡に関連した遺構と考えられるが、詳細は不明である。

#### 4) 土坑

##### ① 土坑1 (挿図6)

調査範囲の東端、溝址1の北西側に検出した。平面形は歪んだ椭円形で、やや東西方向に長い。規模は $105 \times 80$ cmを測り、深さは10cmと浅い。底部は平坦で、壁面は角度を持って立ち上がっている。底部にはぼ密着し、自然石が二個検出されたが、目的を持って据えられているものかは不明である。

出土遺物には、土器と不明鐵器の細片が一点ずつあるのみで、時期、性格は不明である。

##### ② 土坑2 (挿図6)

調査範囲の東端、溝址1の北西脇に検出した。平面形は方形に近い椭円形である。規模は $115 \times 70$ cmで、北東南西方向に長い。深さは21cmを測る。壁面は比較的角度をもって掘り凹められ、底部は平坦である。

遺物は、何も出土しなかった。時期、性格は不明である。

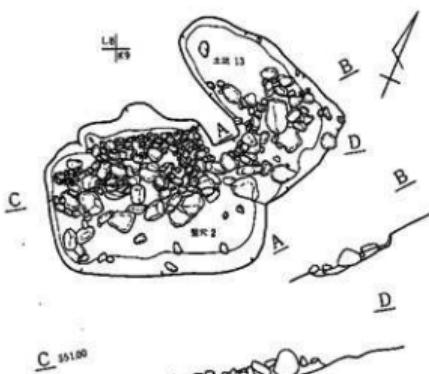


図4 溝址2、土坑13石換出状態

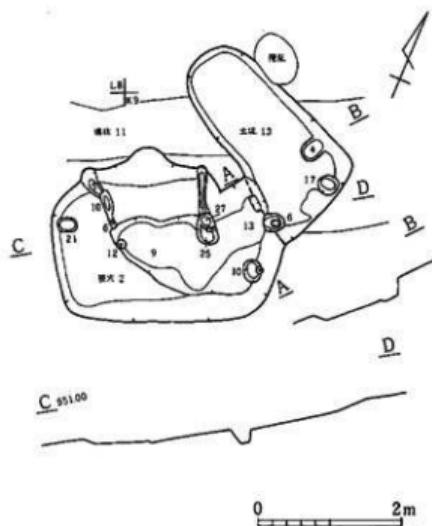


図5 窪穴2、土坑13石換出状態及び最終平面図

### ③ 土坑3（挿図6）

調査範囲の東端部に検出した。当初橢円形の土坑と把握したが、最終的に西側は別の土坑状の穴と切り合っている事が確認された。本土坑の主体の平面形はほぼ円形で、規模は $1.35 \times 1.3m$ を測る。深さは検出面から54cmである。壁面にはゆるく立ち上がる部分と比較的角度をもつ部分がある。最深部は底部中央にあり、壁下からゆるく傾斜している。また、底部南端には穴状に凹む部分があり、底部からの深さは8cmを測る。

出土遺物は無く、時期は不明である。性格も不明である。

### ④ 土坑4（挿図6 第3図）

調査範囲の東側、南端に検出した。平面形は複数の穴と切り合うため不正形で、北側が方形、南側が橢円形の二つの土坑が、切り合っている可能性がある。最大規模は $2 \times 1.9m$ を測り、深さは10cm前後である。壁面は角度を持って立ち上がるが、底部ともに凹凸がある。覆土は黒色土の一層である。また、底部に密着して大小さまざまな石が検出されたが、本址との関連は不明である。

出土遺物には、第3図7の天目茶碗底部がある。けずり出しによる高台で、焼成はきわめて良好、灰白色を呈し、須恵質である。

出土遺物は一点のみで、詳細時期や、性格を明確にできるものではないが、中世の城跡に関連した造構と考えられる。

### ⑤ 土坑5（挿図6）

調査範囲の南隅に検出した。南西側は未調査部分にかかっており、全体規模は不明である。平面形は北東南西方向に長い長方形で、調査できた部分の規模は $95 \times 80cm$ を測る。深さは検出面から10cm程である。底部は平坦なものであるが、小さな穴状の凹が検出された。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は炭混りの黒色土で、拳大の石を数個含んでいる。

遺物は何も出土せず、時期、性格は不明である。

### ⑥ 土坑6（挿図6）

調査範囲の南端溝状址1の北東に検出した。平面形は歪んだ橢円形で、北西南東方向に長い。規模は $1.6 \times 0.85m$ を測る。深さは30cmである。壁面はゆるく立ち上がり、底部との境も明瞭でない。覆土は褐色土の一層で、硬く締まっている。

遺物は、出土しなかった。時期、性格は不明である。

### ⑦ 土坑7 (挿図6)

調査範囲の南端に検出した。南東側は道路により削られており、溝址1、溝状址9と重複しているが新旧関係は不明である。切り合いのため、平面形、全体規模は不明である。調査できた北東壁の長さは1.2mである。深さは18cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁面は比較的ゆるく立ち上がっている。覆土は黒色土の一層である。

出土遺物は、無い。時期、性格は不明である。

### ⑧ 土坑8 (挿図6 第3図)

調査範囲の南端に、溝址1に接するように検出された。平面形は隅丸の方形で、北東西南西方向に長い。規模は $1.4 \times 0.95$ mで、深さは14cmを測る。壁面は西側に比べ東側がゆるく立ち上がる。底部は平坦なものである。覆土は黒色土である。

出土遺物には、第3図8の海浜石があるが、本址に直接伴うものは不明である。出土遺物から、時期、性格は判断できない。

### ⑨ 土坑9 (挿図6)

調査範囲の南側、溝址1の北西に土坑8・11と共に検出した。平面形は方形に近い梢円形で、北西南東方向に長い。規模は $75 \times 55$ cmを測り、深さは7cmと浅い。壁面はほぼ垂直に立ち上がるもので、底部は平坦なものである。覆土は黒褐色土である。底部には密着して石が一個検出されたが、意図的に置かれたものは不明である。

遺物は、出土せず、時期、性格は不明である。

### ⑩ 土坑10 (挿図7)

調査範囲の南端で、道路により削られた部分に近い所に検出した。平面形は方形に近い梢円形で、歪んでいる。規模は $90 \times 80$ cmで、北西南東方向に長い。深さは13cmを測り、壁面は比較的ゆるく立ち上がっている。底部は平坦である。覆土は褐色土である。

遺物の出土は無く、時期、性格は不明である。

### ⑪ 土坑11 (挿図6)

調査範囲の南側で、溝址1の北西に土坑8・9と共に検出した。平面形は歪んだ梢円形で、北西南東方向にやや長い。規模は $70 \times 60$ cm、深さは検出面から15cmを測る。底部は比較的平坦なものである。

ので、壁面は垂直に近い立ち上がりを成す。覆土は黒色土の一層である。

出土遺物は、無い。時期、性格は判断できない。

#### ⑫ 土坑12（押図6）

調査範囲の東端中央に検出した。平面形は、検出面では方形に近い円形を呈しているが、底部は方形である。規模は $1.2 \times 1.05\text{m}$ を測り、北東南西方向にやや長い。深さは32cmである。底部は平坦なものであるが、東から西へ数センチメートル傾斜している。壁面は比較的ゆるく立ち上がるるものである。覆土は黒色土で、拳大と頭大の石を三個含んでいるが、上部に検出されており、本土坑に直接関連するものではないと考えられる。

遺物は、出土せず、時期、性格は不明である。

#### ⑬ 土坑13（押図5）

調査範囲の中央に竪穴2と共に検出した。溝状址11を切るが、竪穴2との新旧関係は不明で、同時存在の可能性が高い。平面形は長方形で、長軸の軸方向はN61°Wを示す。規模は $2.7 \times 1.2\text{m}$ を測り、残存壁高は12cmである。比高差で見ると底部は北西から南東に19cm傾斜し、北西壁の肩から最深部までは29cmを測る。壁面はほぼ垂直に掘り凹められているが、底部共に細かな凹凸が見られる。覆土は黒色土の一層であるが、南東側には多量の石が混入している。ほとんどの石は底部から浮いた状態で検出され、規格性を持って並べられたものでは無いが、竪穴2との関連からなんらかの目的を持って集められたか、まとめて廃棄したものと考えられる。

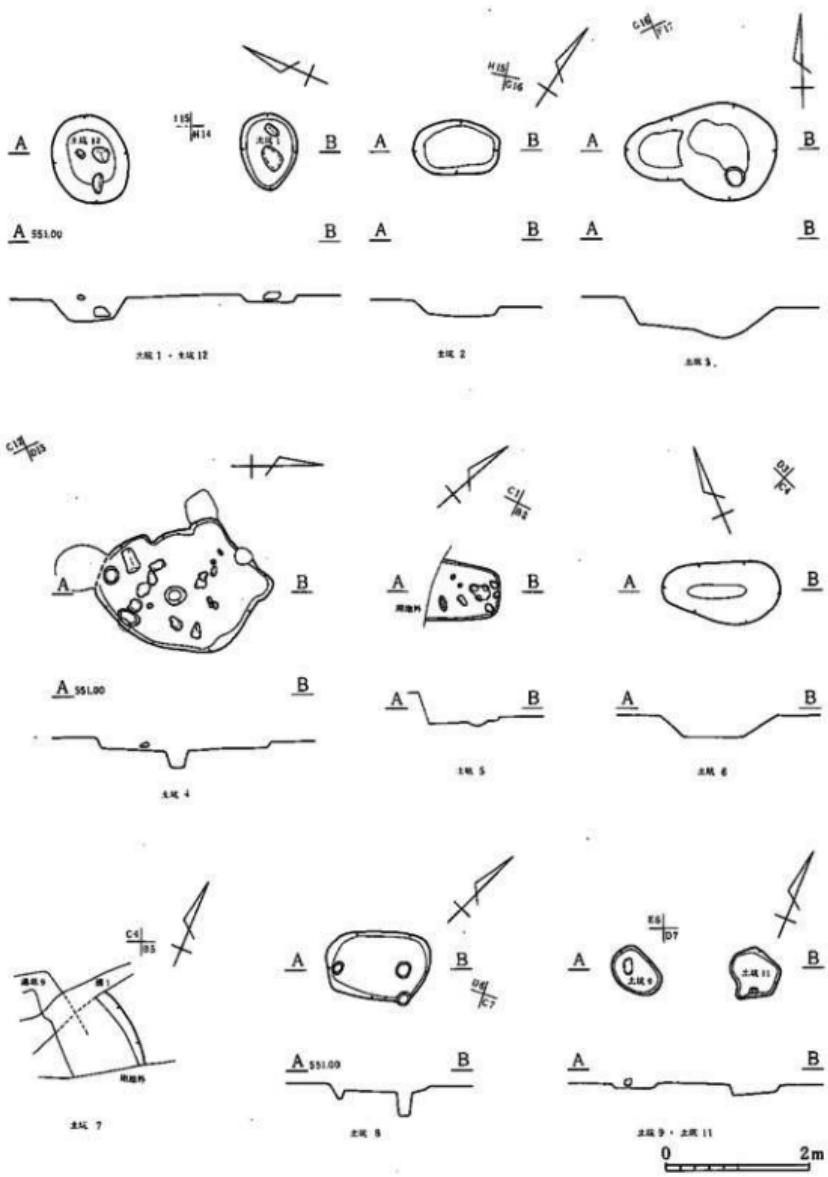
出土遺物は、少ないが、天目片のほか、径2~3cmの焼けた粘土塊一個と、鉄滓二個がある。天目には茶色の釉薬のものと、うすい緑色のものとがあるが、いずれも全体形が知れるものではない。

ほかに、銭の破片があるが、保存状態がきわめて悪く、すべて綠青化していた。

時期は、出土遺物から中世に位置づき、城跡に関連した造構と考えられるが、詳細は不明である。

#### ⑭ 土坑14（押図7 第3図）

調査範囲の西端のほぼ中央に検出した。溝状址5・6を切っている。切り合いのため、掘り上がりの平面形は歪んだものとなったが、検出面ではほぼ方形である。規模は $1.75 \times 1.7\text{m}$ 、深さは28cmを測る。底部は中央に最深部がある、鍋底状で、壁面は比較的ゆるく立ち上がり、両者共に凹凸が認められる。覆土は暗褐色土である。



擇圖 6 土坑 1・12、2～8、9・11

出土遺物は、少ないが、陶器壺、すり鉢がある。壺は図化できないが頸部片で、胎土は須恵質である。内外面共にうすい緑色の釉薬が付されており、肩部にある浅い沈線をこれが埋めている。また、竪穴1から出土した壺の破片と酷似している。第3図9・10のすり鉢には、内外面とも釉薬が付されており、9は紫味をおびた暗い灰色、10は茶色を呈している。焼成はどれも普通である。

時期は、出土遺物から中世に位置付くが、溝状址5からの搬入品の可能性もある。出土遺物が本址のものであれば、城跡に関連した遺構と考えられる。

#### ⑩ 土坑15（押図7）

調査範囲の西端のほぼ中央に検出した。溝状址5と接し、土坑16と切り合うが、新旧関係は不明である。平面形は歪んだ楕円形で、北西南東方向に長い。規模は $1.6 \times 1.314$ で、深さは7cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁面はゆるく立ち上がっている。また、底部中央には15cm程の石が、数個底部に密着して検出されたが、本址に直接付属するものではないと考えられる。

遺物には、うすい緑色の釉薬の天目が一片あるが、細片で、時期、性格を判断できるものではない。

#### ⑪ 土坑16（押図7）

調査範囲の西端のほぼ中央、溝状址5の東側に、土坑15と切り合って検出されたが、新旧関係は不明である。平面形は北西南東方向に長い楕円形である。規模は $1.2 \times 0.8m$ を測り、深さは検出面から9cmである。底部は平坦で、壁面は比較的ゆるく立ち上がっている。

遺物は、何も出土しなかった。時期、性格は不明である。

#### ⑫ 土坑17（押図7）

調査範囲の北端部に検出した。平面形は不正形で、二つの土坑が切り合っている可能性がある。最大部の規模は $1.25 \times 1.25m$ を測る。検出面からの深さは29cmである。底部は中心部に最深部がある鍋底状を呈している。壁面には角度をもって立ち上がる部分とそうでない部分があり、凹凸がある。覆土は黒色土の一層である。

出土遺物は、何も無い。時期、性格は不明である。

#### ⑮ 土坑18（挿図7）

調査範囲の北端に検出し、溝状址8を切っていると判断した。平面形は北東南西方向に長い梢円形である。規模は $1.8 \times 0.9\text{m}$ 、深さは24cmを測る。底部には凹凸があり、西と東に穴状の凹みが検出された。この部分の深さは底部からそれぞれ6cmと9cmである。壁面はゆるく立ち上がり、底部との境もあり明瞭でなく、断面形は「U」字形を呈している。覆土は灰黒色で、溝状址8と大差ないものである。

遺物は、出土せず、時期、性格は判断できない。

#### ⑯ 土坑19（挿図7）

調査範囲の西端に検出した。溝状址4を切り、竪穴1に付属すると考えられる穴と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は北東南西に長い長方形であるが、南側は張り出しており、別の穴もしくは土坑と切り合っている可能性がある。規模は $1.5 \times 1\text{m}$ を測る。深さは本土坑の底部が丁度穴と重複するため、確実なものではないが13cm程と考えられる。壁面はきわめてゆるい立ち上がりである。覆土は黄褐色土である。

遺物には、土なべ片が一片出土した。本址に直接付属するものは不明で、時期、性格を判断できるものではない。

#### ⑰ 土坑20（挿図7）

調査範囲の東端中央に検出した。平面形は長方形で、やや歪んでいる。北西南東方向に長く、規模は $95 \times 60\text{cm}$ である。壁高は深さは7cmを測る。底部は平坦なものであるが、北西側に4cm程傾斜している。壁面は角度をもって立ち上がっている。覆土は暗褐色土である。

遺物は、出土しなかった。時期、性格は不明である。

#### ⑱ 土坑21（挿図7）

調査範囲の中央に竪穴2、土坑13などと共に検出した。溝状址11を切っている。平面形は長方形である。ほぼ東西に長く、規模は $1.6 \times 1.2\text{m}$ を測る。深さは17cm前後である。底部は溝状址との重複部を明確に把握できなかったため、凹凸が激しいものとなった。壁面は切り合いのない部分では、ほぼ垂直な立ち上がりを成している。また、北西壁直下には溝状の凹が検出された。この溝状部上部の幅は25cm、深さは底部から4~6cmを測る。覆土は中央部に方形に多量に炭の混じる黒色土で、周囲は焼土を含んだ黒色土である。

遺物には、土なべ片があるが、確実に本址に付属するものは不明である。

時期は、切り合い関係から、溝状址11より新しいことが把握できただけであるが、周囲の造構の状態等から、城跡に関連した造構の可能性が高い。

#### ② 土坑22 (挿図7)

調査範囲の中央、竪穴2の南に検出した。平面形は椭円形で、北西南東方向にやや長い。規模は $80\times70\text{cm}$ で、深さは12cmを測る。底部は中心部に最深部がある鍋底状となり、穴状の浅い凹が検出された。壁面はゆるく立ち上がるものである。

出土遺物は、無い。時期、性格は不明である。

#### ③ 土坑23 (挿図8)

調査範囲のほぼ中央部、竪穴2の西に検出した。溝状址11と一部重複するが、新旧関係は不明である。平面形はほぼ南北方向にやや長い椭円形である。規模は $90\times75\text{cm}$ を測り、深さは18cmである。壁面には凹凸が認められ、ゆるく立ち上がっている。底部は平坦なものである。

遺物は、出土せず、時期、性格は不明である。

#### ④ 土坑24 (挿図8)

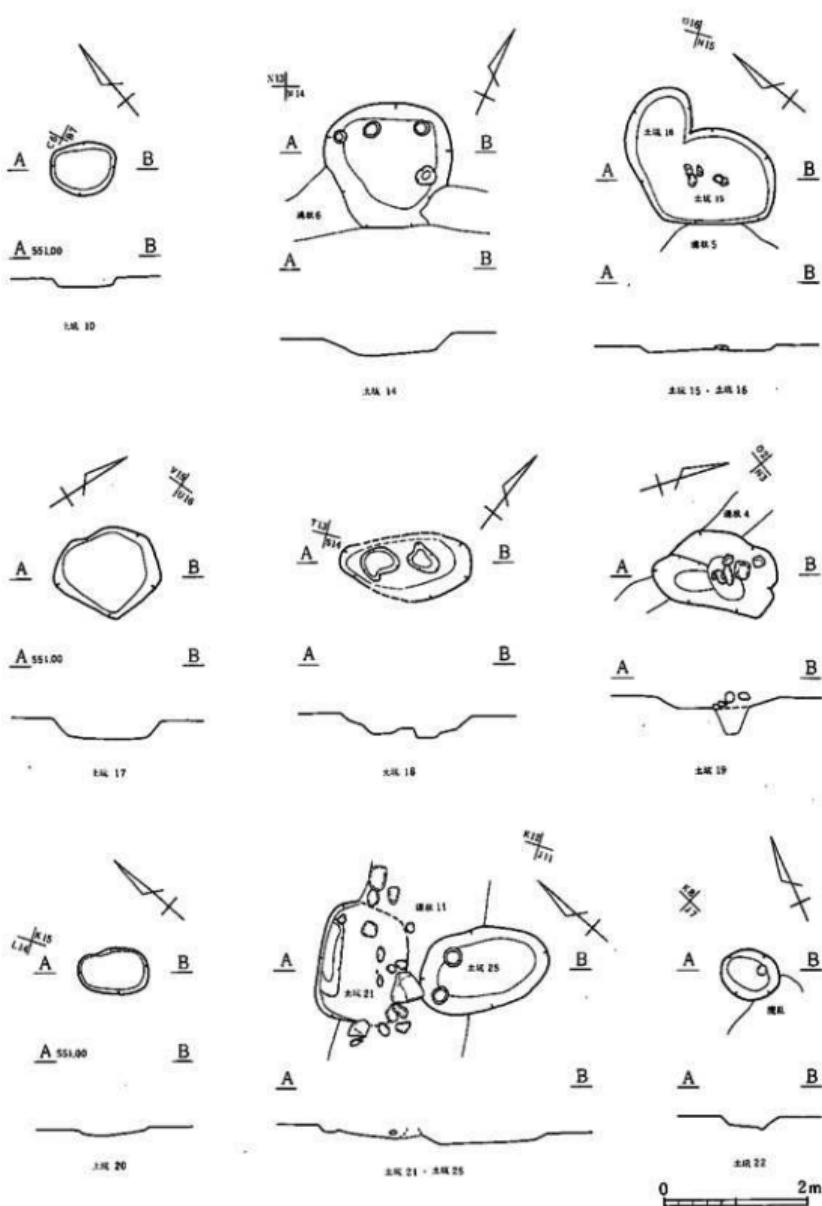
調査範囲のほぼ中央部、溝状址2と11の中間に検出した、平面形は北西南東方向に長い、歪んだ長方形である。深さは検出面から16cm、規模は $1.05\times0.8\text{m}$ を測る。底部は鍋底状に中央部が低くなるもので、深さ8cmの穴が三つ検出された。壁面はほぼ垂直な部分とゆるく立ち上がる所とがある。覆土は褐色土で、頭大と拳大の石を含んでいた。

遺物は、何も出土せず、時期、性格は不明である。

#### ⑤ 土坑25 (挿図7)

調査範囲のほぼ中央に検出した。溝状址11に切られている。平面形は椭円形で、北西南東方向に長い。規模は $1.85\times1.1\text{m}$ を測る。深さは15cmである。壁面は比較的ゆるく立ち上がるもので、底部との境があまり明瞭でない。底部中心に最深部があり、全体として船底状を成している。覆土は暗褐色土である。

遺物は、何も出土せず、時期は、溝状址11より古いことが把握できるだけである。性格も不明である。



挿図7 土坑10・14～20、21・25、22

#### ② 土坑26 (挿図8)

調査範囲の南東部に、土坑4と共に検出した。平面形は不正形で、南西側は方形、北東側は梢円形である。北東西南方向に長く、規模は $2 \times 1.4\text{m}$ を測る。深さは11cmである。底部は平坦なもので、壁面は比較的ゆるく立ち上がるものである。覆土は暗褐色土である。

出土遺物は、無い。時期、性格は不明である。

#### ② 土坑27 (挿図8)

調査範囲の南東端、中央に検出した。南側は道路により削られており、全体が不明のため土坑としたが、堅穴となる可能性がある。平面形は方形と考えられ、確認できた北西壁の長さは3mを測り、この壁の軸方向はN45°Eを示す。北東壁は70cmを確認するにとどまった。壁高は9~11cmで、北西壁はゆるく、北東壁は垂直に近い立ち上がりを成す。底部は総じて平坦なものである。覆土は黒色土の一層で、一気に埋まっている。

遺物の出土は、無い。時期、性格は判断できない。

#### ② 土坑28 (挿図8)

調査範囲の東端に検出した。溝状址5と11が重複する部分を掘り下げ中に把握され、両者に上部を切られている。平面形は長い梢円形で、北西南東方向に長い。規模は $1.6 \times 0.75\text{m}$ を測る。深さは検出面から39cmである。壁面は比較的ゆるく立ち上がり、最深部が底部中央にあるため、断面形は船底状となる。覆土は褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。性格は不明で、時期も溝状址5と11より古いこと以外、詳細は不明である。

#### ② 土坑29 (挿図8)

調査範囲の北西端、中央に検出した。木を残すためにできた未調査部にかかっているが、平面形は北西南東方向に長い、梢円形と考えられる。規模は長軸方向が1.45mを測り、短軸方向は80cm程度が想定される。深さは21cmを測る。壁面には凹凸があり、角度を持つ部分とゆるく立ち上がる所とがある。底部は鍋底状で、中心部がやや低い。

遺物は、何も出土せず、時期、性格とも不明である。

### ② 土坑30（挿図8）

調査範囲の北西端部、中央に検出した。平面形は不正形で、やや北東南西方向に長い。規模は95×90cmを測り、深さは32cmである。最深部は底部中央にあり錐底状で、壁面はゆるく立ち上がるため、底部との境が明瞭でない。

遺物の出土は、無い。時期、性格は不明である。

### ③ 土坑31（挿図8）

調査範囲の北部の造成土を、トレンチ調査したさいに確認した。ほぼ土坑15・16の下部にあたる。土坑32と切り合が新旧関係は不明である。北東南西に長い、舌状の平面形である。規模は1.3×0.5m、深さは検出面から12cmを測る。底部は平坦であるが、北東側に5cm程傾斜している。壁面は比較的ゆるやかなものである。

出土遺物は、無い。詳細時期、性格は判断できないが、周囲の土坑、穴とともに中世以前の遺物の出土は無く、本城跡の前段階の城跡に関連した遺構と考えられる。

### ④ 土坑32（挿図8）

調査範囲の北部の造成土を、トレンチ調査したさいに土坑31と共に確認した。土坑31と切り合が新旧関係は不明である。東側は未調査部にかかり、全体形は不明である。確認した部分の規模は1.3mを測る。深さは12cmである。底部は平坦で、穴が二つ検出されたが本址に付属するものかは不明である。壁面は比較的ゆるく立ち上がっている。

遺物の出土は、無く、土坑31と同様の判断しか下せない。

### ⑤ 土坑33（挿図8）

調査範囲の北部、西側の造成土を、トレンチ調査したさいに土坑34などと共に検出した。平面形は円形である。規模は1m程で、深さは検出面から10cmを測る。底部は穴と重複するため凹凸があり、壁面の立ち上がりも一定でない。

出土遺物は、無い。時期、性格は土坑31などと同様に、本城跡の前段階の城跡に関連した遺構と、判断できるのみである。

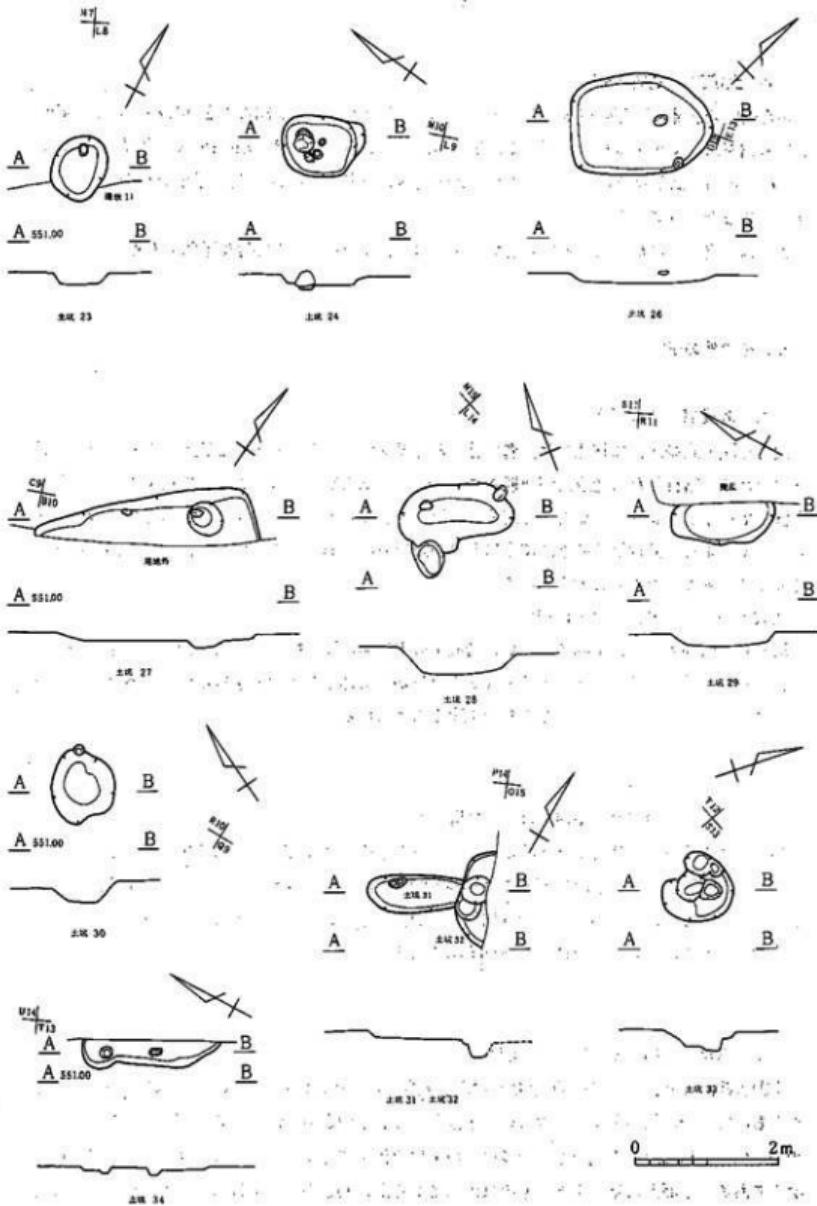


插圖 8 土坑23·24, 26~34

### ② 土坑34（押図8）

調査範囲の北部、西側の造成土を、トレンチ調査したさいに土坑34などと共に検出した。平面形は未調査部分にかかるため、不明である。調査した部分の規模は1.9mを測る。残存壁高は1~9cmである。底部はほぼ平坦であるが、北西側へ5cm程の傾斜がある。壁面には凹凸があり、ゆるく立ち上がっている。

遺物は、出土しなかった。本址も土坑31~33同様、詳細時期、性格等は不明である。

## 5) その他の遺構

### ① 造成部（付図2）

調査範囲の北側部分に確認した。溝状址5の北東壁が、地山である明褐色土の立ち上がりを見せないため、精査した所造成部が把握された。造成土は二層になっており、黒色土の上に褐色土を盛っている。トレンチで調査した部分での厚さは、両者とも30~40cmで、どちらにも炭が混入している。また、溝状址5の下部覆土にも炭が認められており、溝状址5を含めた北側の斜面を造成して、郭としたものと考えられる。

造成土中から、遺物の出土は無い。

造成した時期の詳細は不明であるが、造成土の下にも城跡に関連すると判断される土坑や穴が存在する事、溝状址2・5・6・8・10がこれを切って作られている事などから、幾度となく繰り返された城の増強等に伴い実施された工事と考えられる。

### ② N11・O11グリット焼土部（押図13）

調査範囲の北側、溝状址2と溝状址5の南西壁が、交差する部分の南に検出した。焼土が確認できた範囲は70×35cmで、厚い部分では6cmを測った。焼土を取り除くと、北西南東方向に長い土坑状の凹となったが、検出面上では掘り方は把握できず、土坑として扱わなかった。

遺物は、何も出土せず、時期、性格は不明である。

### ③ 穴址（押図9~15 第4図）

本調査範囲に検出した穴は400余りを数え、大きさは大小に別れる。大きなものは径70cm程を測るもので、全体数からすれば少ない。平面形には、梢円と不正形のものとがある。深さは5~30cmを測り、10cm以下の浅いものが多い。覆土は黒色土である。小さな穴は径25cm前後のものが中心である。平面形はほとんどのものは円形であるが、30cm程の穴には方形のものがある。深さ

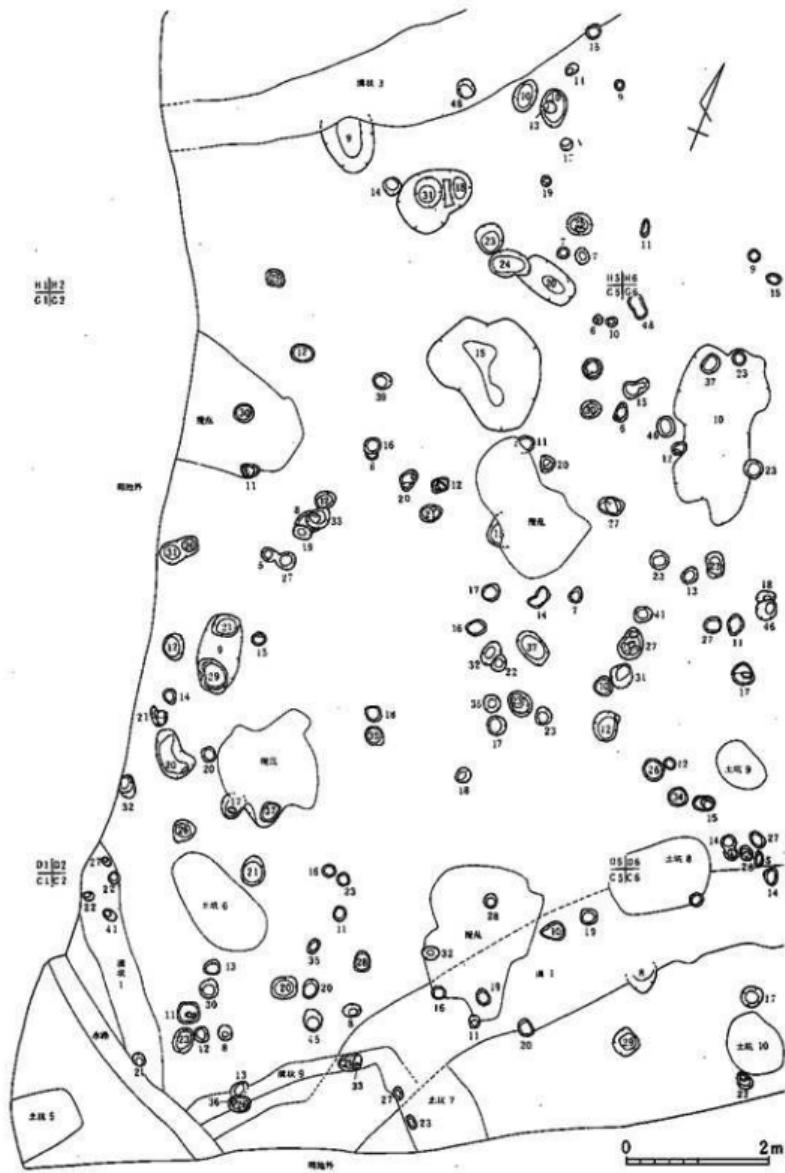


插图 9 南部穴址

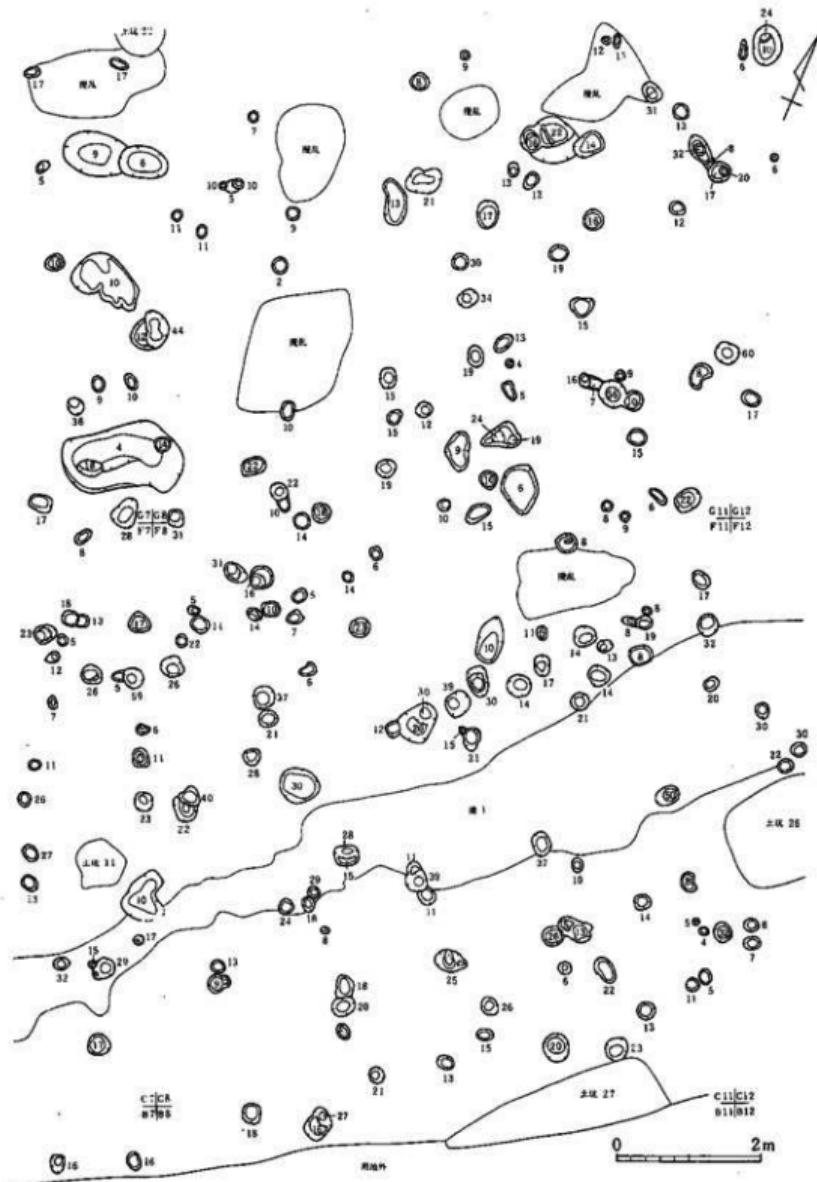


插圖10 南東部穴址

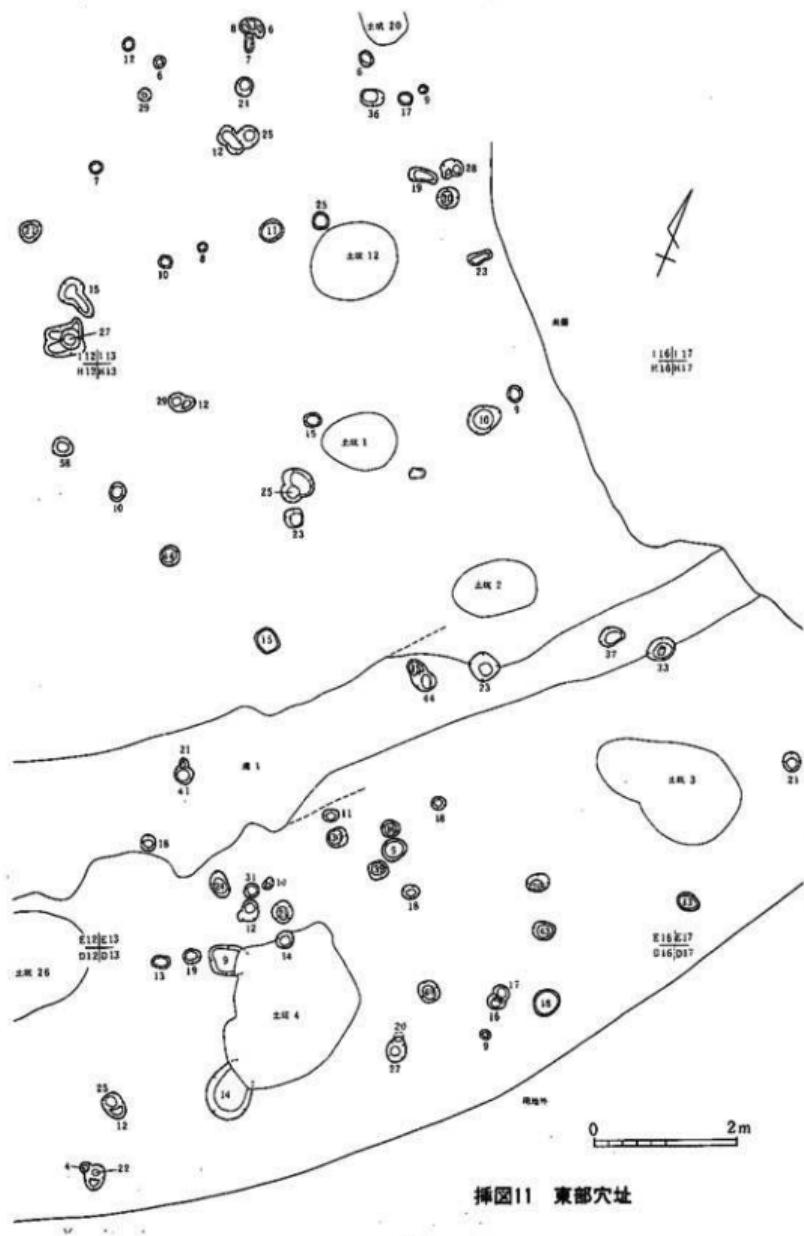


図11 東部穴址

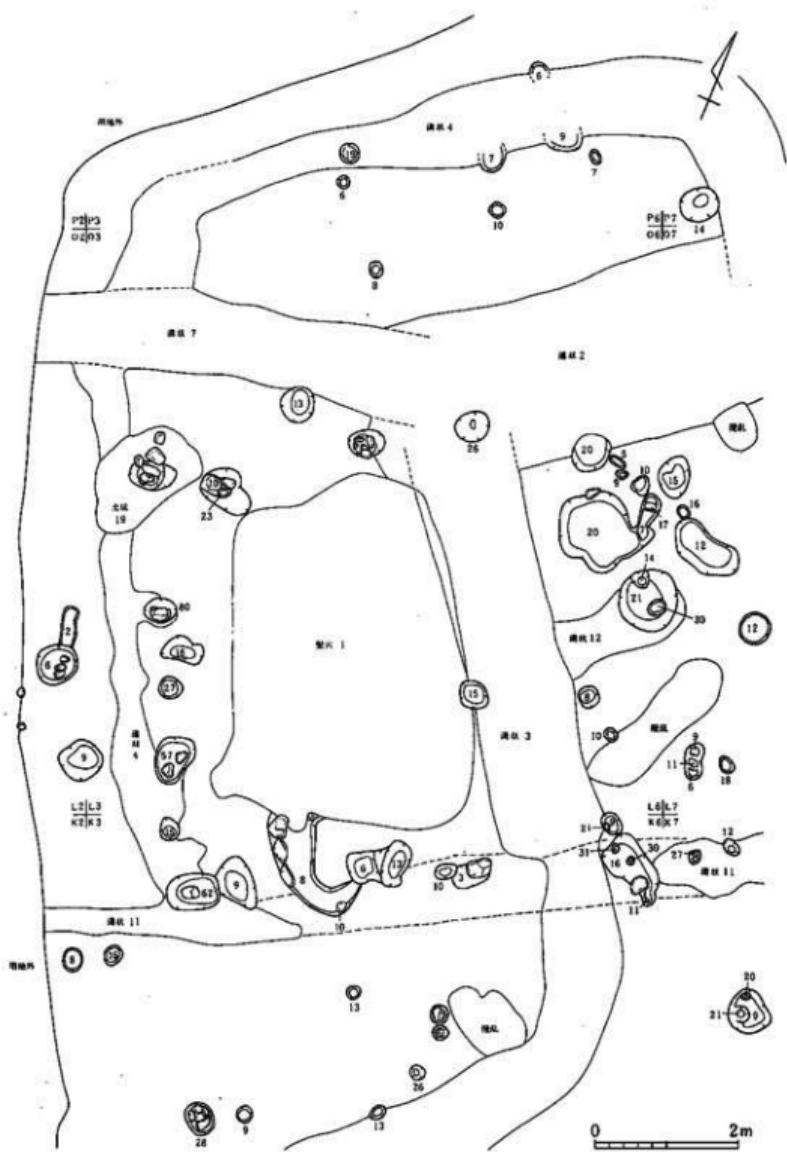
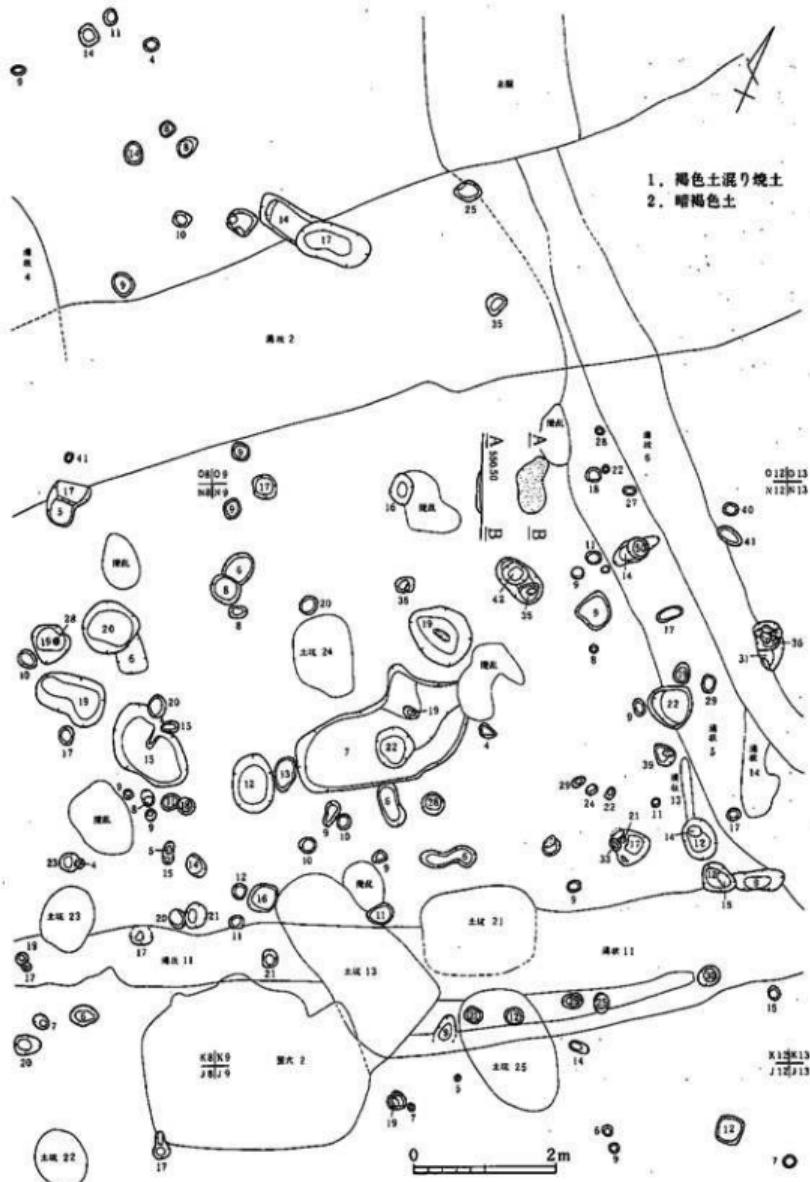


插图12 西部穴址



挿図13 北西部穴址、N11・O11グリッド焼土部

は4～60cmまで測るものがあり、15～30cm程のものが多い。覆土は黒色土で、全体の八割程には炭が混入していた。

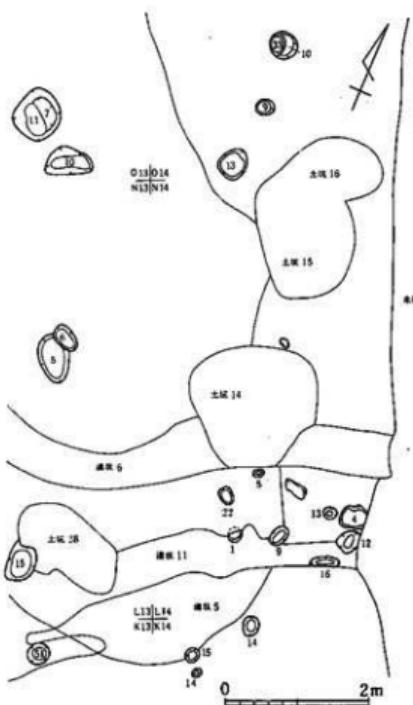
大小どちらの穴にも規則的な配列は認められず、特徴的な掘り方のものも無い。なんらかの目的で、柱を建てたものと考えられるが、その性格は不明である。

遺物を伴う穴は、少なく、同じ穴から出土したものではないが、天目、陶器、磁器があり、指先ほどの鉄滓を出土するものもある。

天目には第4図1～3があり、1は茶碗の高台部で、うすい茶色の釉薬が全面に付されている。2・3は茶碗と底部に糸切り痕を残す皿である。それぞれ、1/8と1/4残存し、うすい黄緑色とうすい緑色の釉薬が、内外面とも付されている。焼成はどちらも良好である。4の陶器は1/2残存するものである。色調は茶白で、焼成は良好である。5の高台部は磁器である。胎土は須恵質で、断面の色調はうすい灰色を呈している。焼成は良好、内外面ともに、うすい緑色の釉薬が厚く付されている。

ほかに、6～10の敲打器がある。検出した穴に直接付属するかは不明であるが、6～7は一つの穴からの出土で、差し込んだような状態であった。

時期は、すべての穴から遺物の出土を見たわけではないが、ほとんど



補図14：北部穴址



挿図15 北部造成土トレンチ調査部分穴址

の穴の覆土が同じ事や、周囲で確認した遺構の状態から、中世の城跡に間連した柱穴と考えられる。

#### 6) 遺構外遺物(第5・6・7図)

##### 縄文時代・弥生時代

縄文時代から弥生時代の土器の出土は皆無で、数点の石器の出土を見るのみである。遺構が伴わないので、はっきりしないが、これら石器は縄文期に位置付くものであろう。

第5図1～5は打製石斧で、大小二種があるようであるが、五点の内、四点が破損品で細部の形態は不明である。6～7はラフな作りの横刃型石器である。9の石鎌が黒曜石であるほかは、みな石材は硬砂岩である。

##### 古墳時代

本期も前時代同様遺構の検出ではなく、土器などの出土も無かった。しかし、本期に位置付くものとして、第5図10の子持勾玉が一点出土した。出土位置は溝状址5の南東端部で、郭の造成土中である。

出土した子持勾玉は、尾部先端が欠損するが、長さ7cm、幅3cmで、背面と側面にそれぞれ

三個づつ、内側に一個の突起をもち、いわゆる「子」は合計十個である。精巧で均整のとれた優品で、表面には金属器による切削痕が顕著に認められる。東部先端は平坦に作られており、尾部も同様の作りをされていたものと考えられる。断面はほぼ八角形で、「子」はすべて本体から独立して突起している。

全国では二百八十余点を数える。長野県内では十三個の出土例があり、伝世品も含めると二十六個が存在し、これに続く二十七個目の発見となる。今回出土したものも含め七点は天竜川沿いの伊那谷にあって、下伊那地方では高森町に二例、阿智村に一例、飯田市内では、三穂の別曾原から出土したものに次いで二例目となる。また、本出土品は、「子」の数や、作り出の形態は異なるものの、頭尾両端に平坦面を持つという特長は、別曾原から出土したものと同様の形態を成すものである。

子持勾玉は、今回の調査のように偶然、単独で発見される事が多く、出土した遺跡の性格が、わかっているものは全国的にも数例しかなく、特異な形状と共に依然なぞの遺物と云える。

### 中世

検出した遺物は、少なくみな破片で、図化等できたものには、天目、灰釉、すり鉢がある。

天目は、第6図5の皿のほかは、すべて茶碗である。茶色または黒色の釉薬が付される1~5と、緑色の釉薬の付されるもの6・7がある。底部が残存するものは皿も含め、すべて削り出しの高台である。断面の色調はすべて茶白を呈し、焼成も良好である。残存状態は1・2・5・6がそれぞれ、1/6・1/4・1/8・1/5で3・4は図化部、7は光残存している。8は糸切り痕を顕著に残す底部である。一般によく見られる灰釉陶器の胎土で、微小石粒を含み、色調は明灰色を呈しているが、残存部に釉薬は認められない。焼成は良好である。9~17はすり鉢の破片である。底部が残存する16・17には糸切り痕が見られる。15は破損した側面が荒く研磨されており、なにかに再利用されている。どれも、焼成は良好で、いわゆる鐵釉が内外面共に付されている。9・10・13は暗灰色、11・12・14・16・17は暗茶色、15は茶色を呈している。

磁石として、18・19の二点があり、両者とも、どの面にも顕著な使用痕が見られる。

ほかに、鐵器二点がと、親指の頭程の鉄滓が數点ある。第7図12は調査範囲北の造成土から出土したものであるが、用途は不明である。13は頭部が欠損するが釘である。

本調査で、出土した遺物は、一部の石器、石製品を除き、大半が中世に位置づき、前時代の遺構の検出もなかった。しかし、これは城跡という性格上大規模な工事がなされたことは云うまでもなく、これに伴い前時代の遺構が覆い隠され、または削平された結果と考えられ、中世以外の遺跡の存在を否定するものではない。

## IV まとめ

今回の調査は、飯田市座光寺児童館の建設に先立ち調査された。調査地点の現地目は竹林で、地表面で城跡に関する施設は捉えられないが、昭和56年に座光寺小学校の移転新築に伴い調査された結果と、これに先立ち行った測量調査によって本調査地点は城跡のなかでは二の郭の一画にあたり、北側からの攻撃に備えた場所もしくは、居住空間の一画と把握できる部分で、実際の調査によりなんらかの新発見が見い出せるものと考えられた。

実際の調査結果としては、中世・城跡関連した造構以外は検出できず、遺物についても前時代のものは石器などがわずかに出土したのみである。

検出された造構は、すべてが同時期に存在していたものでは無く、二から三時期に分けられる。中心に石を配した施設を伴う特殊な建物址と考えられるもの、なんらかの区画を意識して掘られた溝のほか、多数の穴が検出された。座光寺小学校の移転新築地区に伴い実施された、本地点南側の発掘調査の十分な検討がなされていないため、城跡全体からみて本地点が二の郭の一画にあたるほかは、どのような役割をはたしていたのかの位置付けは、不明な点が多い。しかし、この場所には、恒久的な建物などの施設のほかに、簡易的な建物や柵などが存在していた事が把握された。この事は、当初考えられた、北からの攻撃に備えると共に、居住空間としても利用されていたことを、裏付けたものと云える。

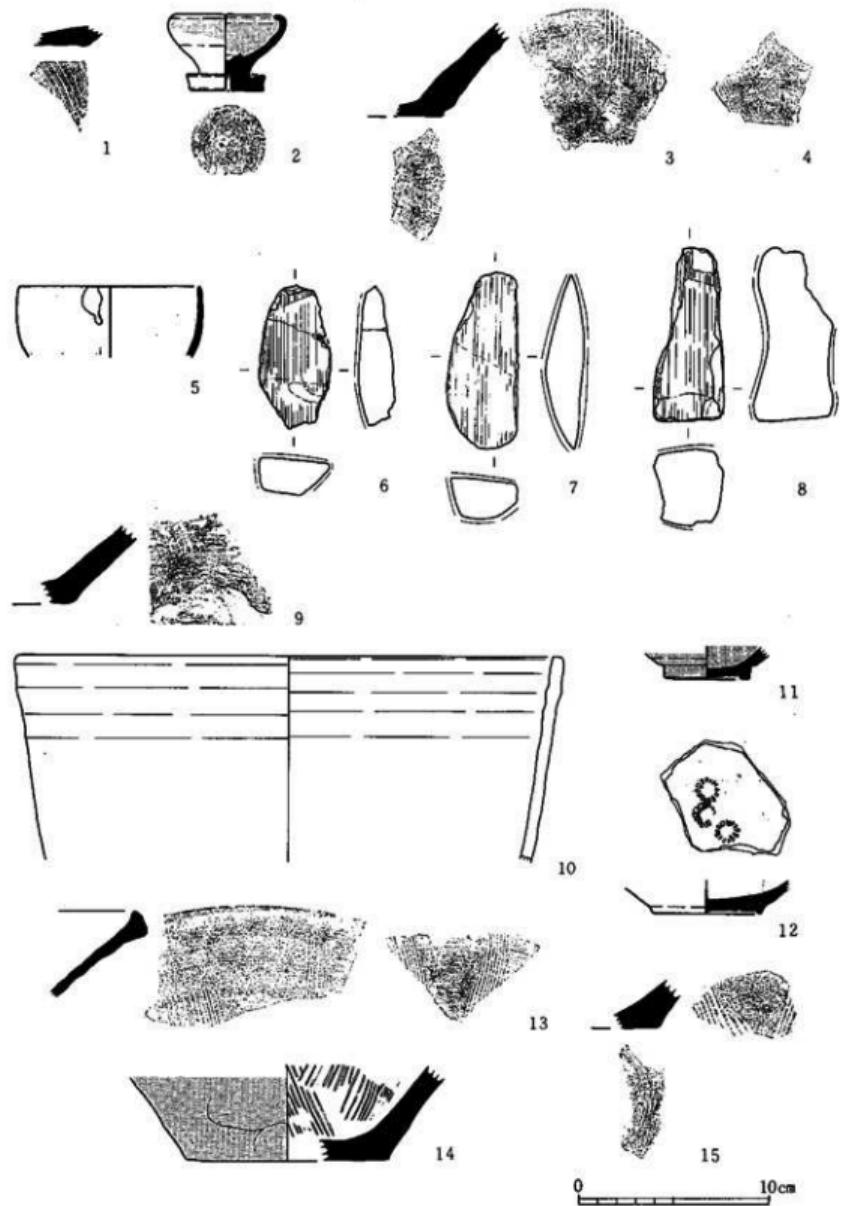
本北本城跡は早くから、空濠、土塁等を備えた中世の山城として所在は知られていたが、16世紀中頃松岡氏の支城であったとの伝承のほかは、その築城、廃城等の事実関係を見いだせる文献等はなく、今だにその経過はまったく不明である。そのため、実際に居住していた士族も不明のままではあるが、座光寺の地名と共に通する座光寺氏に関連した城であることは推測できる。また、小沢谷を二つ挟んで南西に存在する南本城との位置付けも重要なものとなる。北本城・南本城とともに、その築城等の事実関係は不明であるが、戦国期、武田・織田・徳川等の攻防の中で、かなり重要な位置にあったと考えられる。

当地区内において、最近増加している発掘調査の結果に於いても、本城跡を含め、中世以降は断片的な資料が検出されるのみで、この時期の、歴史事実の全体像は不明と言わざるをえないが、わずか350mしか離れていない地に、北本城、南本城の2城址を構築した人々の基盤が、この地区内に居住していたことは間違いない、古墳時代以降、もしくはこれ以前からの土地利用の姿を検討し、より明確にすることが、本地域内における中世以降の中心的地区の把握にもつながるものと考えられ、強いては伊那谷全体から見た、本城跡の役割をも明確にする事ができるといえる。

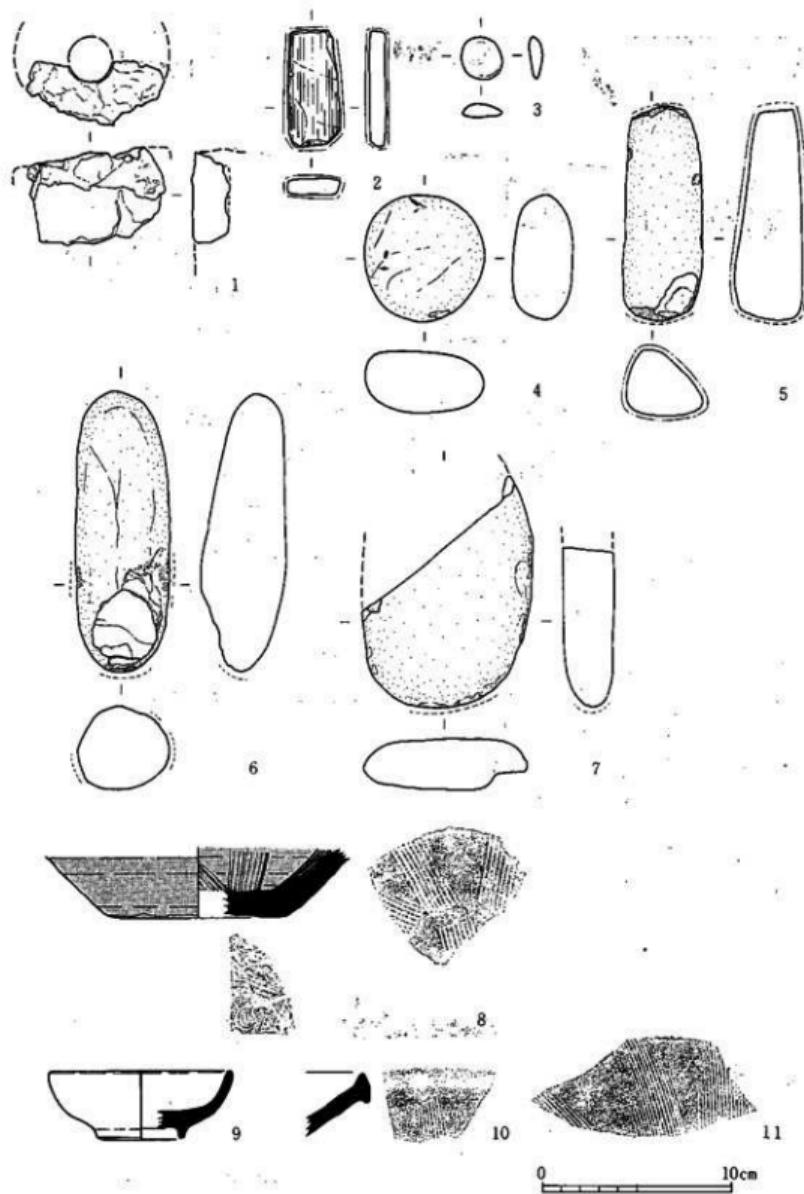
## 参考文献

- 下伊那教育会編 1991「下伊那史」第1巻 下伊那史編纂会  
市村成人 1955「下伊那史」第2巻 下伊那史編纂会  
市村成人 1955「下伊那史」第3巻 下伊那史編纂会  
市村成人 1955「下伊那史」第4巻 下伊那史編纂会  
松島信幸 1966「伊那谷の段丘」 下伊那地質誌調査資料No.2  
飯田市教育委員会 1986「恒川遺跡群」  
南信濃村教育委員会 1986「尾の島館遺跡」一条痕文系土器・中世城館跡－  
桜井弘人 1982「伊那谷における子持勾玉四例」『信濃』三九巻 第四号 拡粹  
下伊那郡高森町教育委員会 1990「吉田城山城跡」  
下伊那郡下條村教育委員会 1990「吉岡城跡」

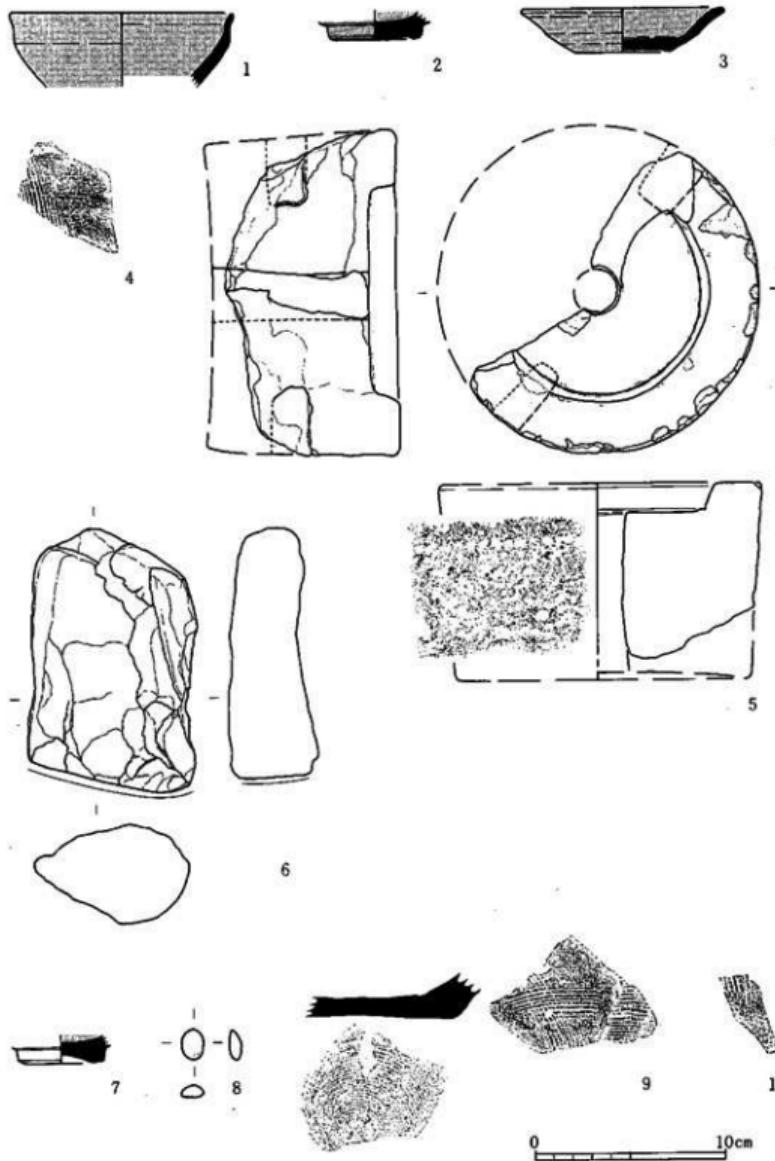
# 図 版



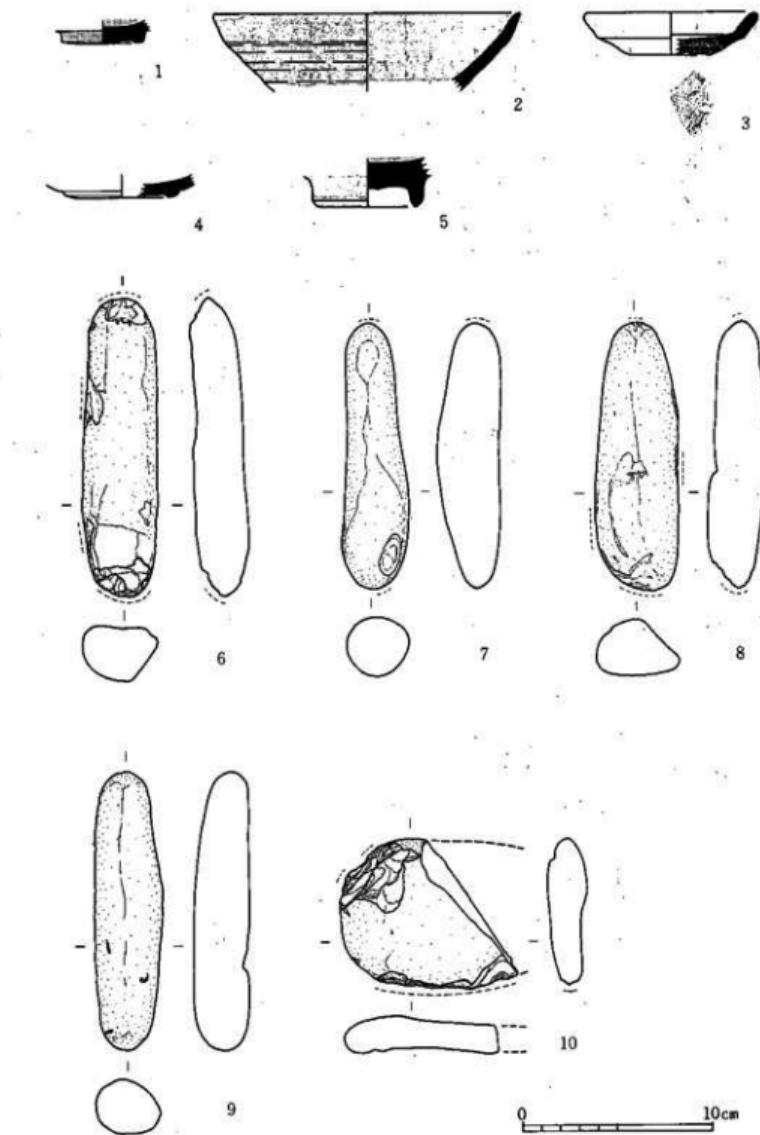
第1図 溝状址2・4・5出土土器、石器



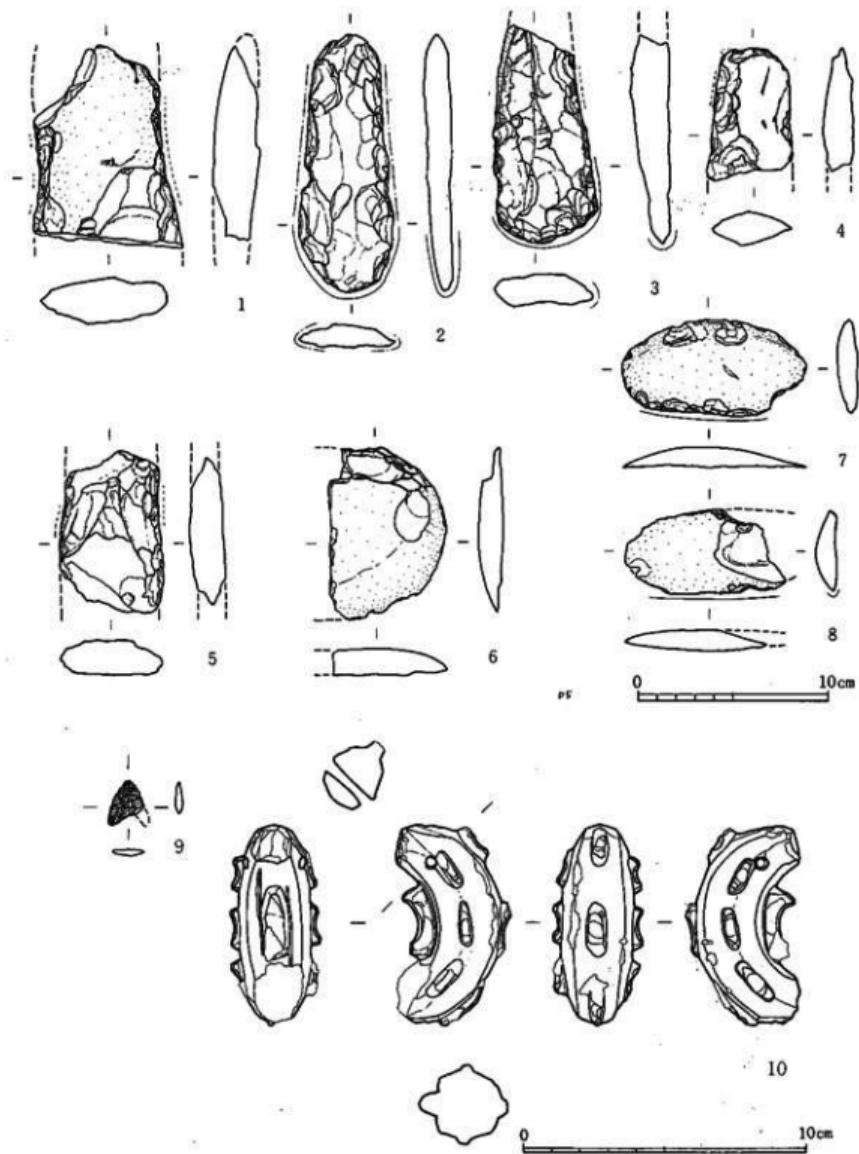
第2図 溝状址5・6・7・11出土羽口、石器、土器



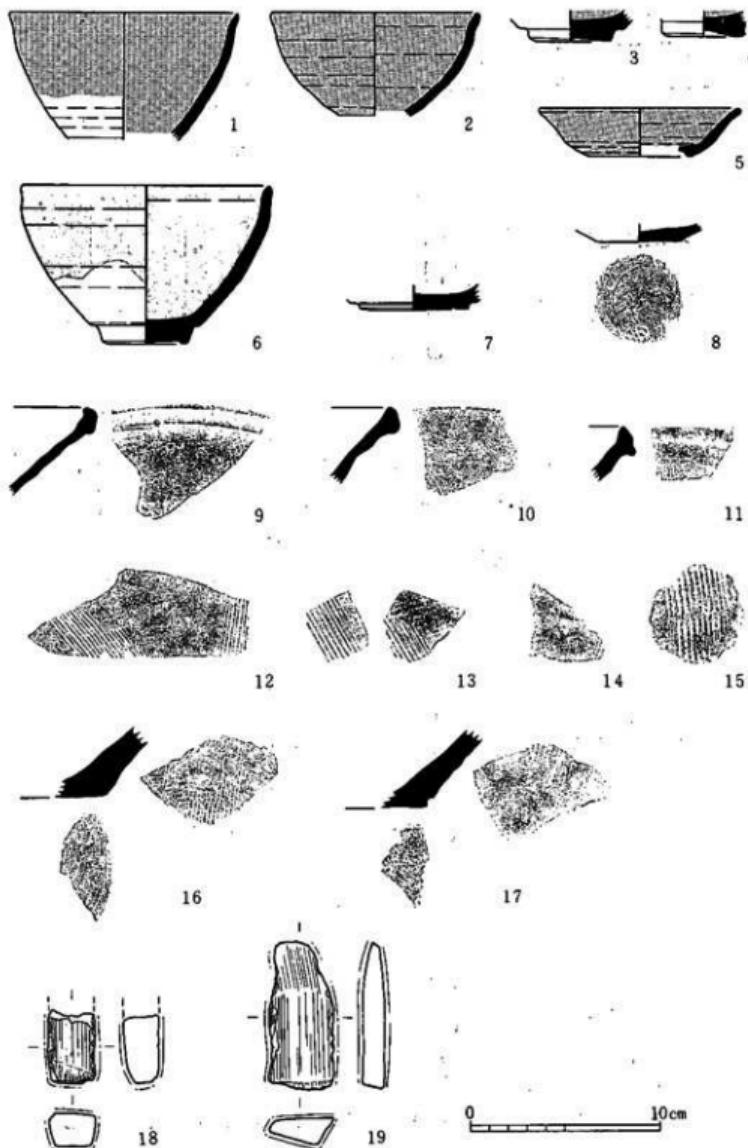
第3図 穹穴2、土坑4・8・14出土土器、石臼、石器



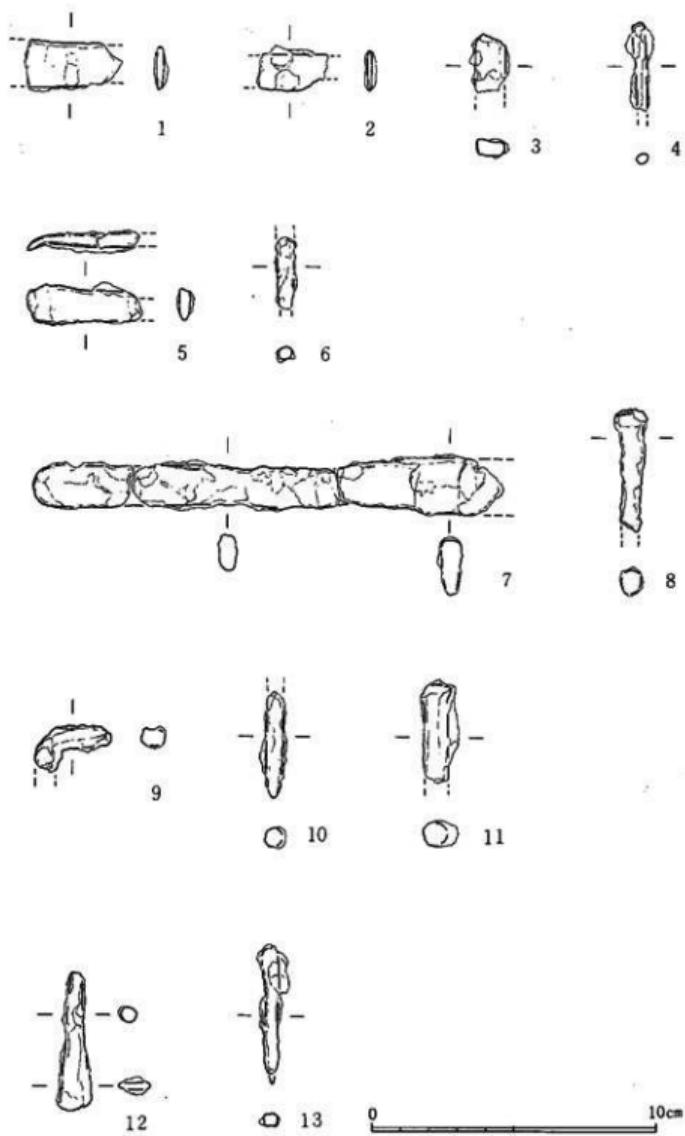
第4図 穴址出土土器、石器



第5図 造構外出土石器、子持勾玉



第6図 遺構外出土土器、石器



第7図 溝状址2-5-6-11造構外出土鉄製品

# 写 真 図 版

図版1



調査地調査前（南から）



調査地全景（南東から）



調査地全景（南東から）



調査地全景（北西部）

図版 3



溝状址 1



溝状址 2 (西から)

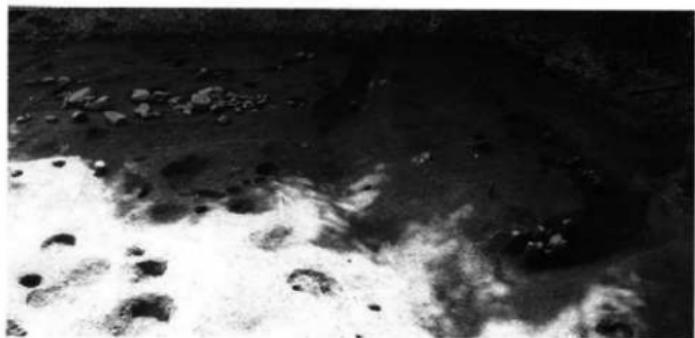


溝状址 2 (東から)

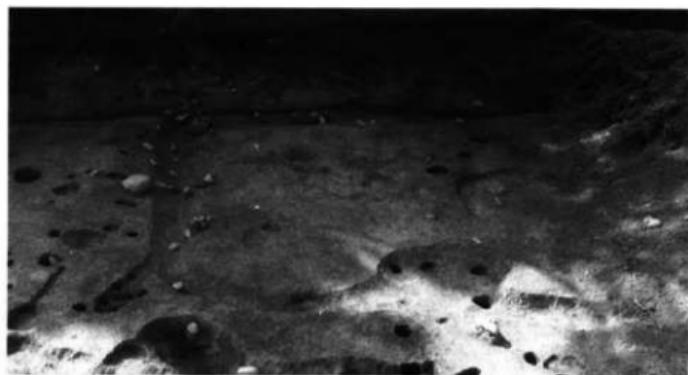
图版 4



溝狀址 3・7

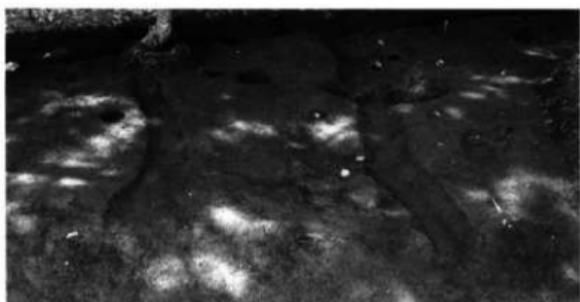


溝狀址 4・7-(3)

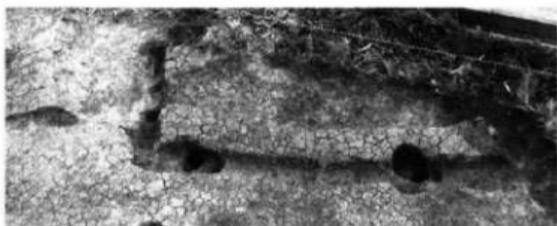


溝狀址 5・6

図版 5



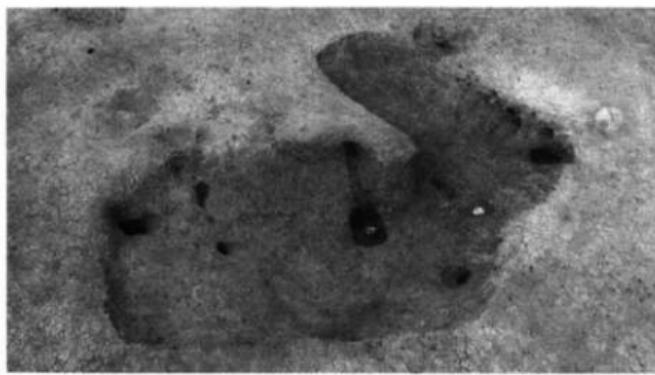
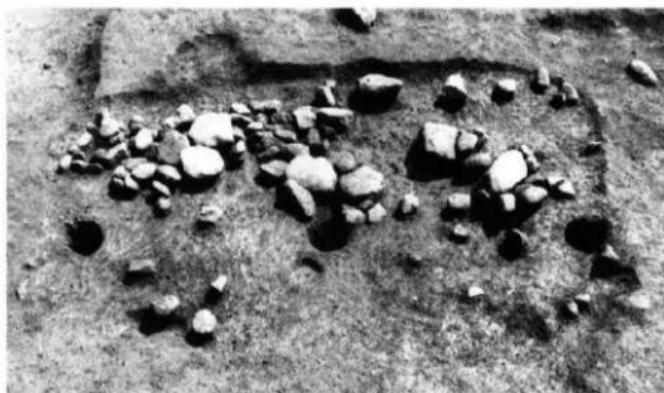
溝状址 8・10  
(右から)



溝状址 9



溝状址11

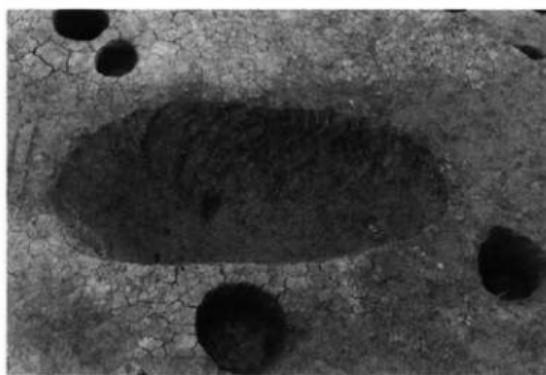


图版 7

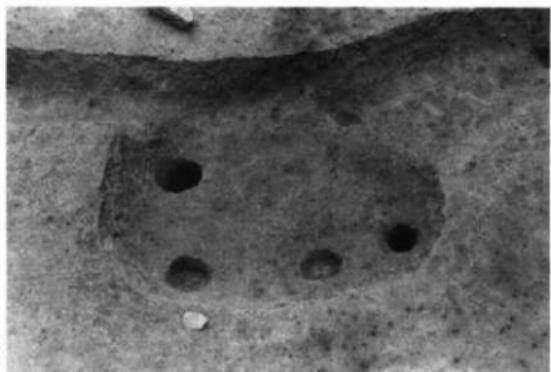


竖穴 2 遺物出土状態

図版 8



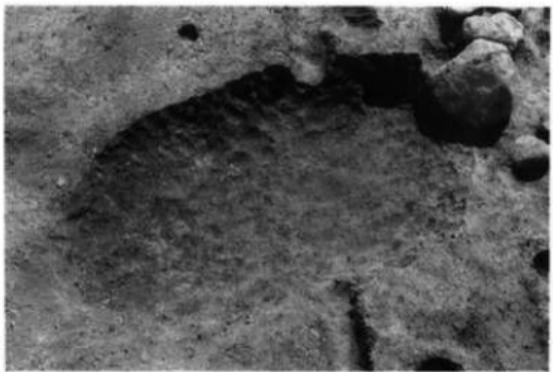
図版 9



土坑14



土坑24



土坑25



穴址掘り上げ状態



同上

図版11



造成土  
トレンチ調査部分



同上



子持勾玉  
出土状態



溝状址2出土仏器



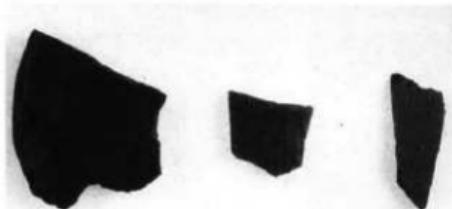
溝状址2出土黒色釉天目



同上（上面）



同すり鉢



同陶器・磁器



同砥石

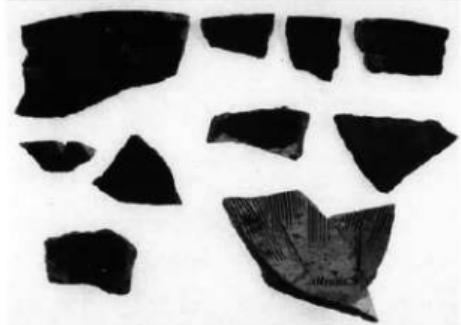
図版13



溝状址5出土 黒色釉天目



溝状址5出土 緑色釉天目



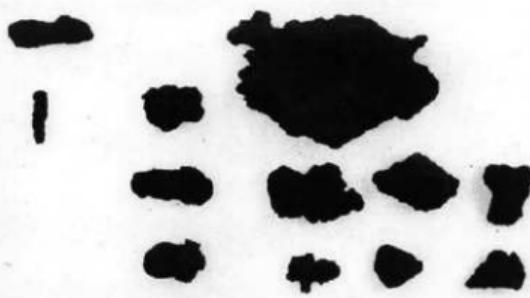
同すり鉢



同上



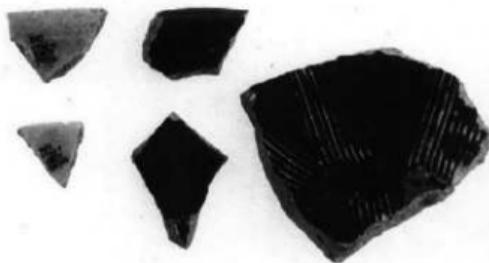
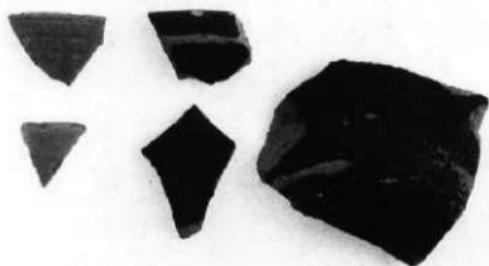
溝状址 5 出土 羽口



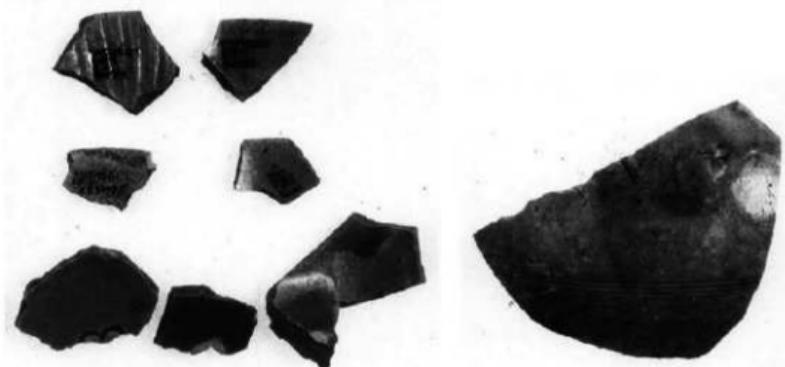
溝状址 5 出土 鉄器・鉄津



溝状址 6 出土 鉄器

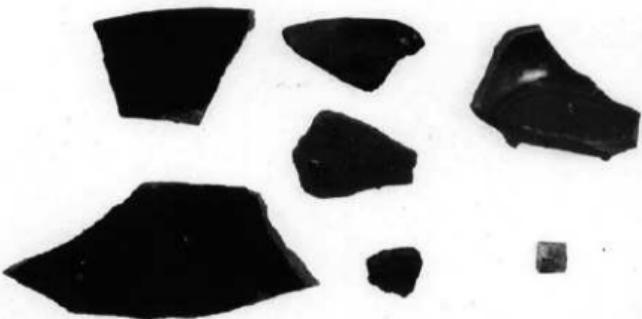


溝状址 7 出土 緑色釉天目・すり鉢

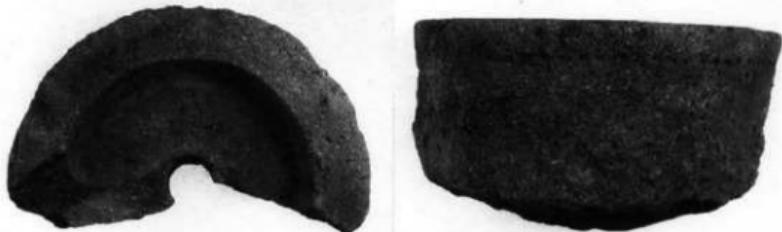


溝状址11出土 緑色釉天目・陶器

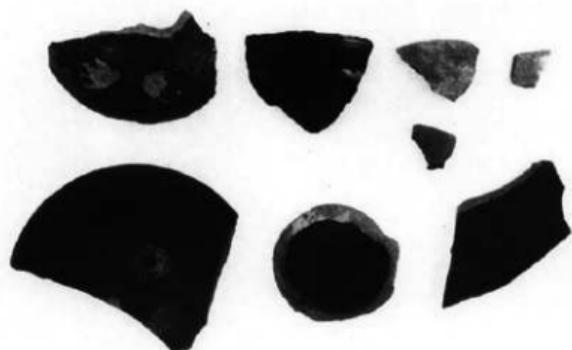
同 陶器



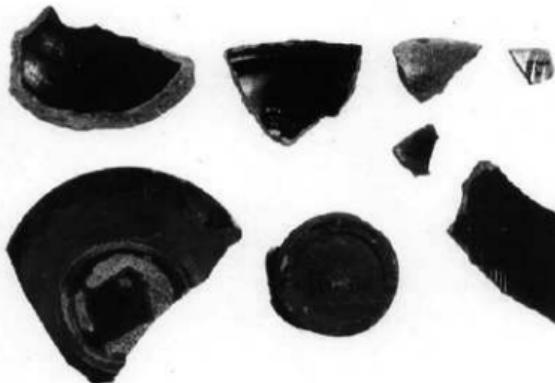
同上 すり鉢・土器・磁器・陶器



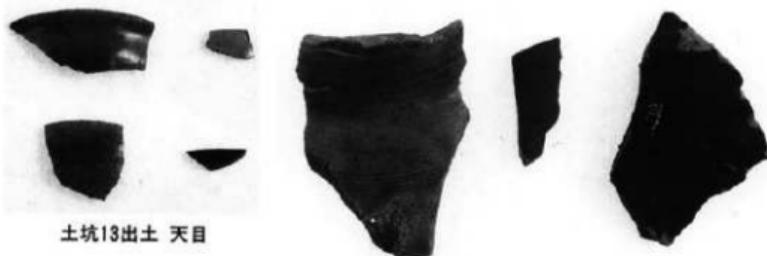
豎穴2出土 石臼



竪穴2出土  
天目・すり鉢



同上



土坑13出土 天目

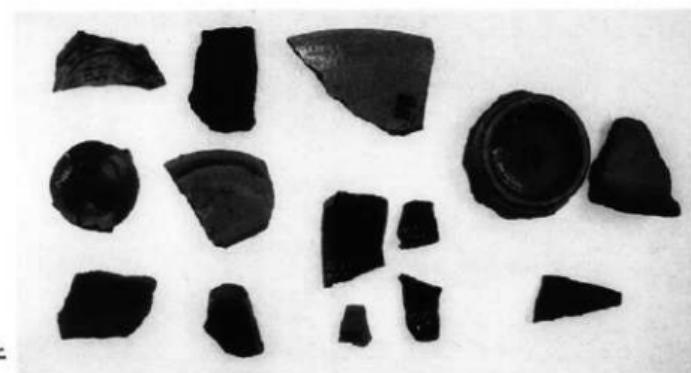
土坑14出土 陶器・すり鉢

図版17

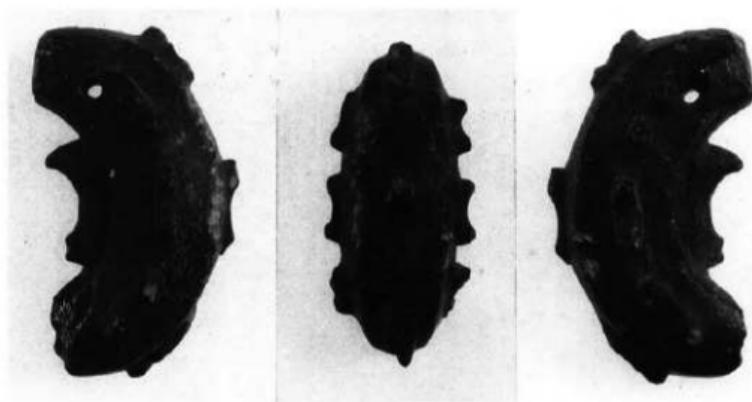
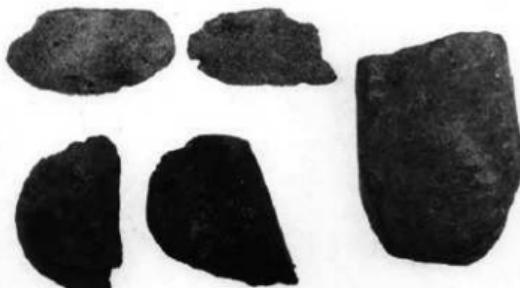
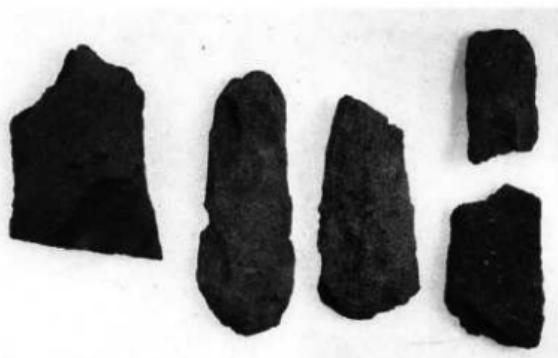
穴址出土  
天目・陶器・土器



同上

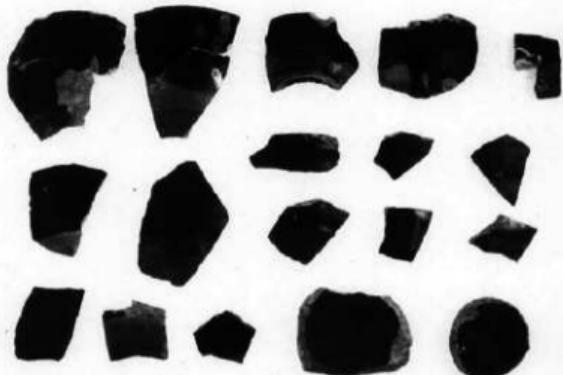


遺構外出土 黒曜石石鎚・剝片



図版19

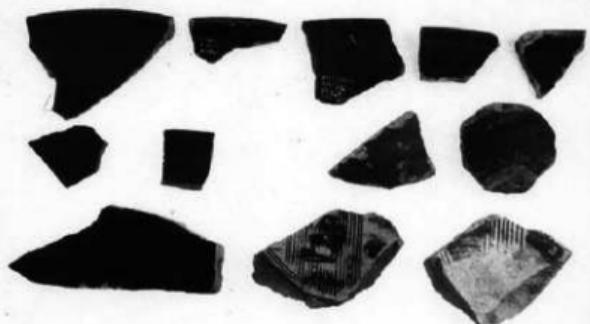
遺構外出土  
黒色釉天目

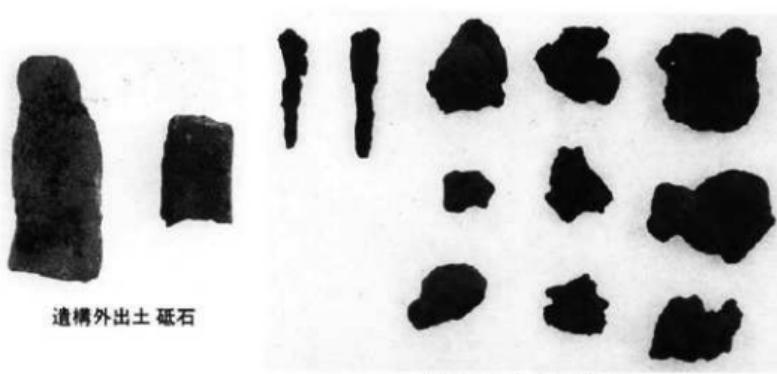
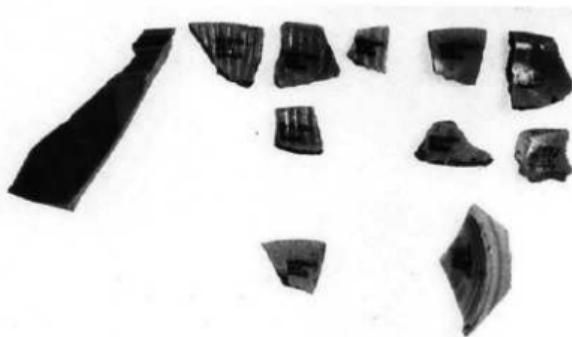


同  
緑色釉天目



同  
すり鉢





遺構外出土 鉄器・鉄滓

図版21



重機による  
表土剥ぎ作業



浮き土の排除作業



造構検出作業



造構掘り下げ作業



同上



造成部トレーンチ調査

図版23



## 北本城々跡

飯田市座光寺地区児童館建設に先立つ  
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

平成4年3月

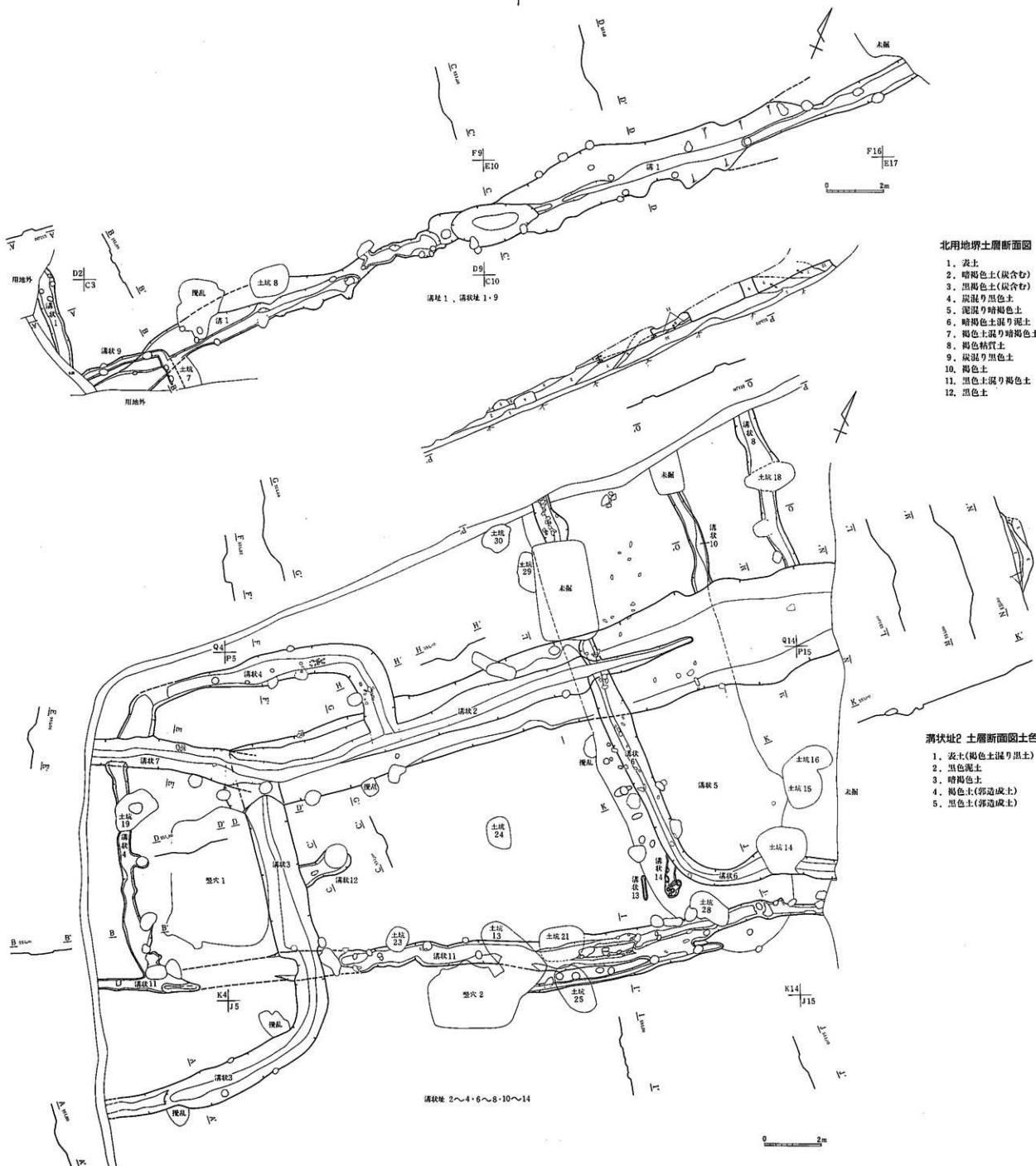
編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地

飯田市教育委員会

印 刷 飯田共同印刷株式会社



付図1 北本城々跡 造構位置図



付図2 溝状地1・溝状地1-9、溝状地2~4・6~8・10~14

